



徳島大学渭水会々報

第47号

発行／徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中 双鶴 氏



さん
「燦」

田村 昇鶴 氏

あざやかなさま

きらびやかなさま

美しく鮮やかに光り輝くさま

渭水会が益々輝いて欲しいという願いをこめて。

関連記事→P14

目 次

会長ご挨拶	会長就任のご挨拶	渭水会会長 濱尾 巧久 ……	3
Topics	第10回とくしま芸術文化賞、渭水会より3年連続受賞 ……		4
	音楽との出会いは、人との出会い	生駒 元 ……	5
特集	徳大とともに30年、徳島大学生協		
	●徳島大学生協のあゆみ	徳島大学生協専務理事 高橋 敬司 ……	6
新連載①	総科をたずねて		
	●総合科学部2号館での教育研究について	総合科学部准教授 河原崎貴光 ……	10
	●描くことの原点	尾田 理左 ……	11
	●社会人になって	瀬戸口 遼 ……	12
一本の筆		田村 實(昇鶴) ……	14
研究最前線⑥	がん医療従事者のサポートに向けて		
	総合科学部 社会総合科学科 心身健康コース 福森 崇貴 ……		16
子供たちにつなぐ戦争の記憶		城戸 久枝 ……	17
連載⑤	私の職場 My Workplace		
	●どこかで繋がる好きなこと	長尾 重美 ……	18
	●地方自治体の学芸員として ～文化財保護行政の最前線～	立野康志郎 ……	20
輝く新星④	～第4回渭水会会長賞～		
	●サーフィンと共に在る私の生き方	武知 実波 ……	22
	●知りたいことを知るために	畑 和実 ……	23
	●「悔しさ」と「満足」	橋本顕太郎 ……	24
	●大学での経験と新たな挑戦	釜江 梨紗 ……	26
	●渭水会会長賞表彰要項 ……		26
総科のおたから	〔其ノ六〕 昭和36年徳島大学学芸学部乃図	峯 幸子 ……	27
エッセイ			
	●子どもが演じる阿波の国子ども歌舞伎	瀬戸 昌子 ……	28
	●我が人生	岡田 年弘 ……	30
	●草創期の恩師を偲んで	山田 秀雄 ……	31
助成事業			
	●徳島大学四小三八会研修会及び同窓会	吉田 裕子 ……	32
	●徳島市退職校長会講演会	藤田 正治 ……	32
	●第3回阿波の国子ども歌舞伎公演	瀬戸 昌子 ……	33
	●高校・特別支援学校総会並びに講演会	竹内 圭三 ……	34
	●徳島大学四小課程(昭和39年卒業)研修会及び同窓会	岡田 年弘 ……	35
総科ニュース			46
徳大ニュース			48
事務局だより・編集後記			50
徳島大学創立70周年記念 ホームカミングデー(渭水会主催)のお知らせ			51



渭水会会長
はま お よしひさ
濱尾 巧久

ご挨拶

このたび、平成30年度徳島大学渭水会総会におきまして選出され会長をさせていただくことになりました濱尾巧久でございます。

これまで本会発展にご尽力されました多くの先輩、また石井博前会長をはじめ歴代の会長様のご業績を考えると身が引き締まる思いが致します。会員並びに役員各位のご指導をいただき微力ながら本会の発展に尽くしたいと存じますのでどうかよろしくお願いいたします。

渭水会は、平成26年度より徳島大学総合科学部の学生に対して何ができるのかということで、石井前会長様のご尽力により「渭水会会長賞」が創設されました。本会の会則に「会員の母校との連絡を密にし、母校の発展に寄与することを目的とする」とあり、平成29年度は4名の方が表彰されました。

また、「会員相互の友誼」として渭水会助成事業も多くの応募があり、渭水会正会員の研究会・講習会・その他、有意義な催し物について助成がなされました。「会長賞」と「助成事業」を核として渭水会の今後益々の発展を強く願うところであります。

ところで、私は徳島市退職校長会のメンバーと共に平成21年度より、徳島市内の小学校4年生から6年生までの希望者を募り、一緒に歩いてお寺廻りをする「子ども歩き遍路ツアー」を始めました。

これは地域の文化遺産に触れるとともに、その地域の文化を発信できる子どもを育てたい。また、歩くことの楽しさや充実感・達成感、そして、ねばり強い心、たくましい心を育成し、結果としての体力の向上を目指したいという思いからです。更に平成24年度より、もっと多くの子ども達にこの体験を広めたいと小学校の学校行事の遠足を「歩いて」お寺廻りをしてはどうかと提案しました。

四国遍路を「世界文化遺産登録」への動きもあり、平成24年度に1校で始まった「遠足サポート事業」も、平成29年度は小学校の遠足サポートだけでなく公民館の活動のサポートを含めて約1,000名近くの子どもの達等の体験へと広がりました。

子ども達と歩いている中で、私自身が地域のすばらしい文化遺産を発見することも度々です。

特に3番札所金泉寺から4番札所大日寺へ向かう山あいの遍路道に「岩田ツヤ子の碑」があります。その碑文には「第二次世界大戦中、国の方策に依り、藍作りは、食糧増産の為禁止作物となった。藍は一年草の為、毎年種を採り続けないと途絶えてしまう。(中略)警察の目を逃れて命がけでこの地に於いて、5・6年間種を採り続けた。捨て身の努力で守られた藍の種に依り、戦後一早く藍作りが復活した。」とあります。

子ども達と一緒に歩いて「碑」のあることは十分知っていたものの、碑文をゆっくり読むこともありませんでした。平成26年8月14日の徳島新聞「鳴潮」の記事を見て改めて「岩田ツヤ子」さんのすばらしさに気づかされたものであります。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムが決定されました。藍色の三種類の長方形を組み合わせています。徳島の藍が世界へと期待されます。

「鳴潮」は次の文で締めくくられています。「阿波藍が戦争で危機にひんし、それを救った女性がいたという話は県内でも広くは知られていない。戦争の記録とともに語り継いでいきたい。」

今、一億総活躍社会を目指しているといわれていますが、徳島にこのようなすばらしい女性がおられたことは誇らしく、うれしい限りであります。

最後になりましたが、この度退任されました石井博前会長様はじめ関係各位の皆様にご心よりお礼申し上げますとともに今後ともご指導いただけますようお願い申し上げます。

(昭和40年 学芸学部4年制小学校課程卒)



チェリスト、指揮者として活躍している ^{いこま はじめ} 生駒 元さん

平成29年度 第10回とくしま芸術文化賞 (音楽／洋楽)を受賞!

とくしま芸術文化賞は、徳島県における芸術文化の振興に特に業績顕著な個人の活動を顕彰するために、平成20年度より公益財団法人 徳島県文化振興財団が行っているものです。平成27年度は児童文学作家のくすのきしげのりさん、平成28年度は彫刻家の鎌田邦宏さんと作家の竹内菊世さんが受賞され、本誌でもご紹介しました。そして、平成29年度は、徳島交響楽団や徳島交響楽団ジュニアオーケストラの指揮者として、またチェリストとして活躍されている生駒 元さんが受賞されました。渭水会より3年連続で受賞者が輩出されたことは、本当に喜ばしいことです。

●プロフィール

昭和20年9月26日生まれ。徳島市出身。現在、板野郡藍住町在住。

1968年徳島大学学芸学部小学校教員養成課程卒業後、県内小・中学校、附属養護学校、徳島県国体局、県立山川少年の家などに勤務しながら、徳島交響楽団チェロ奏者・指揮者・専務理事、徳島交響楽団ジュニアオーケストラ団長・指揮者を務める。

徳島中学校勤務中には、徳島中学校オーケストラ部の顧問として同部を指導し、こども音楽コンクール西日本大会に出場、最優秀賞を連続受賞するなど輝かしい成績を残す。

音楽教員として、小中学校等に勤務する傍ら、徳島交響楽団(1971年)や徳島交響楽団ジュニアオーケストラ(2008年)の創立に中心となり関わり、短期間で国内有数のオーケストラとして成長させる。

徳島交響楽団においては、1970年よりその前身である徳島市民管弦楽団設立準備委員会委員長として参加し、1971年の創立に尽力。チェロ奏者、初代事務局長、1978年より副指揮者、1992年より指揮者として団の運営、発展に寄与。2007年には「国民文化祭・とくしま2007」閉会式・グランドフィナーレにて、三木稔作曲「ふるさと交響曲」を指揮(初演)。2008年には、徳島交響楽団ジュニアオーケストラの創設に尽力し、団長・指揮者として後継者の指導・育成に取り組む等、徳島県内における音楽文化、特に管弦楽の振興において著しい功績を挙げている。

また、1992年に家族によるKOMA Ensemble(コマ・アンサンブル)を結成。Music Gardenと題したコンサートや、さまざまなイベントでのコンサート、保育所・幼稚園・小・中学校における子どもたちのためのコンサートの開催、また、「学校への芸術家派遣事業」による演奏等、ヴァイオリン・チェロ・ピアノ・リオによる演奏活動を幅広く積極的に行っている。

2016年 NPO「子どもの明日 ^{ひら}とくしま」理事長に就任
2013年 平成25年度徳島県表彰(国民文化祭功労表彰)
2018年 平成29年度第10回とくしま芸術文化賞 受賞



「とくしま芸術文化賞」授賞式では、恩師である吉森章夫先生(徳島県文化振興財団芸術文化委員会委員長)より賞状を授与されました



KOMA Ensemble。音楽一家である生駒家ならではの

●Information

徳島交響楽団ジュニアオーケストラ 第11回コンサート

日時/2018年11月25日(日) 14時～

場所/徳島県教育会館1F大ホール 料金/入場無料

組曲「白鳥の湖」抜粋(チャイコフスキー作曲)、「輕騎兵」序曲(スッペ作曲)ほか

2019トヨタファミリーコンサート徳島交響楽団 ニューイヤーコンサート

日時/2019年1月6日(日) 14時～ 場所/鳴門市文化会館

料金/一般1,500円、小中高生500円(当日券は各400円増し)

指揮:井村誠貴、バンドネオン独奏:小松亮太 リベルタンゴ(ピアソラ作曲)、チェコ組曲よりポルカ(ドヴォルザーク作曲)ほか

お問合せ/音楽喫茶みき内 徳島交響楽団 (TEL 088-665-6678)

—音楽との出会いは、人との出会い—

私と音楽との出会いは、徳島中学校オーケストラ部でチェロと出会ったときからである。同校にオーケストラ部が出来て2年目だった。何となく遊び友達と入部し、顧問の吉田久夫先生に勧められた楽器がチェロだった。60年あまり経った現在までチェロやオーケストラを続ける基となったのである。

徳島大学では、オーケストラ漬けの学生生活であった。偶然にも入学したときに、日本フィルハーモニー交響楽団チェロ奏者だった小笠原洋三先生と出会うという幸運に恵まれた。それまで自己流だった奏法を構え方から始まり一からやり直し、本格的に学んだ。現在でもチェロを楽しむことが出来るのはそのお陰だと思っている。徳島大学交響楽団は、フルオーケストラになったばかりであったので1年間じっくり練習し2年生の時に第1回定期演奏会を行った。徳島大学交響楽団では演奏技術だけでなく、委員長として、運営のことや人間関係の大切さを学んだ。

「新しい一般のアマチュアオーケストラを設立し、卒業後もオーケストラを続けよう」。卒業2年目から仲間と動き始めた。高校生の時からの人間関係を生かし、県内の弦楽器奏者のお宅をほとんど訪問し、新しいアマチュアオーケストラの必要性を話す。1970年より設立準備委員会委員長として参加。1971年、25歳の時に前身の徳島市民管弦楽団を創設。チェロ奏者、初代事務局長として団の運営にあたる。その後、副指揮者や指揮者を歴任し、現在は専務理事。団員の最古参として団の運営を支えている。

2007年の国民文化祭・とくしま2007「おどる国文祭」でジュニアによる合同演奏が実現した。この好機に何とか長年の夢であったジュニアオーケストラを創立し、後継者の育成をしようという思いを強くした。

「音楽をする楽しさを第一に教え、音楽が好きな子を育ててほしい」「合奏する喜びを知り、将来も演奏を続けるきっかけになってほしい」と、2008年にジュニアオーケストラを創設し、団長・指揮者として育成に取り組んでいる。ここでの出会いを大切に、一生音楽が続けられる人に育つことを願っている。

2007年と2012年の国民文化祭「オーケストラの祭典」では、実行委員長を務める。2007年の「おどる国文祭」閉会式・グランドフィナーレでは、三木稔作曲「ふるさと交響曲」を指揮。オーケストラと邦楽・合唱というスケールの大きな難曲であったが、たくさんの助言や応援を頂き成功裏に終えることが出来た。

1992年、「難聴児のためのコンサート」を依頼された。妻と長女はピアノ、次女はヴァイオリン、私がチェロという音楽一家だったので、「それじゃ、家族でやろう」。KOMA Ensemble 演奏の第一歩である。家族だからこそ出せる味わいのあるアンサンブル、こだわりのあるアンサンブル、魂のこもった感動を呼び起こす音を目指し、以来、27年あまり保育所・幼稚園・小・中学校などで子どもたちのためのコンサートや、様々なイベントでのコンサート活動を行っている。

このような活動に対し、平成25年に「徳島県表彰」、平成30年には「とくしま芸術文化賞」受賞。これは、ここまで半世紀以上、一緒に走り続けてきた家族、仲間、応援していただいた周りのすべての人のお陰である。

音楽との出会いは人との出会いでもある。今も新しい出会いが多くあり楽しみである。健康の続く限り県内の音楽文化の発展に寄与したい。

(昭和43年 学芸学部小学校教員養成課程卒)

徳島交響楽団ジュニアオーケストラも創立から早や10年。
写真は2013年の創立5周年記念コンサートにて



徳大とともに30年、徳島大学生協

学生たちの食生活をサポートする学食、大学生活に必要なものを取り揃える購買、事故や病気・ケガに備える学生総合共済など、徳島大学生協はさまざまな面で大学生活を支えています。2017年11月に創立30周年を迎え、ますます充実する徳島大学生協をご紹介します。

徳島大学生協のあゆみ

徳島大学生協専務理事 たかはし けいじ
高橋 敬司

徳島大学生協は昨年11月に創立30周年を迎えました。生協が設立するまでは、主に「徳島大学厚生会（1960年設立）」が学内の厚生福利団体としてその機能を果たしてきました。しかし組織的には任意団体としての限界もあり、その発展的解消が学内で論議され、生協設立の世論が広がっていきます。そして1987年11月14日に多くの教職員・学生の賛同により徳島大学生活協同組合は創立総会を開催、翌年2月に厚生会を解散し新たに生協としての事業を開始しました。

生協ができたとはいえ、常三島キャンパスでは第1食堂・喫茶と購買、蔵本キャンパスには購買のみという状況で、早々に取扱事業を拡大する必要がありました。1989年に旅行業務の取扱いを開始し、翌1990年には書籍部門を開設し本格的に教科書等の販売を開始しました。その後大学との共催事業に取り組み、最近の10年間は福利厚生施設充実のための店舗開設やリニューアルを実施してきました。以下、30年の主な歩みを列挙します。



高橋専務理事（左）と
食堂部担当の古賀大貴さん



現在の常三島キャンパス内の店舗

●History

- 1987年 徳島大学生生活協同組合創立総会
- 1988年 徳島大学生生活協同組合設立認可
徳島大学厚生会解散
- 1989年 購買部常三島店 一般旅行代理店業認可
- 1990年 書籍部常三島店、書籍部蔵本店開設
- 1991年 徳島県生活協同組合連合会加盟
- 1993年 第1食堂2階オープン
- 1994年 大学より下宿斡旋業務の委託を受ける
- 2000年 大学より学内TOEIC試験実施について委託を受ける
公務員試験合格対策講座を徳島大学就職専門委員会と共催で開講
- 2004年 パソコン総合サポート講座を徳島大学就職専門委員会と共催で開講
- 2005年 第1食堂東側テラスを大学に寄付
新入生サポートスタッフ制度を開始
食育ミールカード制度の開始
新入生のつどい開催
1年生全員対象のTOEIC一斉試験の運営受託
- 2006年 第一食堂にトイレ新設のため生協事務所建替え、大学に建物を寄付
- 2007年 医学部基礎学実験研究棟に新店舗KURA-LAオープン
創立20周年記念式典開催
- 2009年 徳島大学で開催する公開TOEICの試験運営を開始
シンボリストリートに新店舗CAFÉ San-Jyo(さんじょ)オープン
TOEICコミュニケーション講座を徳島大学就職支援会議との共催で開講
- 2011年 工業会館1階に新店舗Emi*re(えみり)オープン
- 2013年 蔵本食堂の運営を受託、新店舗キッチンSAKU-LA(さくら)オープン
蔵本店をLAKU-LA(らくら)、SHOKO-LA(しょこら)としてリニューアル
常三島第二食堂の運営を受託、店舗愛称creA(クレア)としてオープン
- 2014年 学生会館改修工事に伴い常三島店をリニューアル
- 2015年 学生生活支援課より運営委託され、アルバイト情報紹介(Web)を開始
国際課の依頼を受け、ハラルフードの提供をEmi*reで開始
- 2016年 第一食堂がDining kirara(キララ)としてリニューアル
- 2017年 創立30周年記念式典開催



学生・教職員が生協設立賛同者署名活動や生協についての学習会を行い、設立運動を進めていきました



大学の構成員(学生・教職員)による約10年間の設立運動を経て、1987年11月、生協創立総会を開催しました



30年前の常三島キャンパス第一食堂。懐かしい!

●現在の徳島大学生協（常三島キャンパス）

徳島大学生協は、組合員の意見を取り入れ、年々充実し、利用しやすくなっています。
現在の生協の様子をご紹介します！

総合科学部側

Diningキララ（第1食堂）

カフェテリア方式でお好きなメニューを選ぶことができます。数種類の副食からメインのおかずを選び、味噌汁とお好きなサイズのご飯に野菜などの小鉢を組み合わせることで、栄養バランスのとれた食事を摂ることができます。学生に人気の副食は「鶏ポン唐揚げ」や「ロース豚カツ」で、小鉢では「ハムポテトサラダ」や「ほうれん草」がよく出ています。大学内の「学食」として、学生生活の基盤となる充実した食事環境を提供するとともに、大学卒業後も自分で考えてより良い食生活を送ってもらいたいと思っています。



Diningキララは、白を基調にした明るく開放的な雰囲気

カフェテリア方式以外にも、量り売りのビュッフェゾーンや麺類と丼のコーナーもあります。卒業生の皆様も大学にお越しの際は是非お立ち寄りください。



安心安全な食材で健康をサポート！レシートには摂取カロリーが表示されます



好きなメニューが選べる
カフェテリア方式。
メニューも豊富です



野菜や副菜は量り売り。
あれもこれもと、ついとりすぎ
ちゃうのが問題（笑）

学食で同窓会!?

懐かしい母校の学食で同窓会をしてみませんか？ 最近の学食はアルコールも取り扱っているんです（もちろん20歳以上限定ですよ）。日時や内容は要相談。予算に合わせてお酒、料理をご用意。常三島食堂Diningキララでは10～200名まで対応！

お料理は、格安コースお一人1,000円から、舟盛りや寿司、ローストビーフなどの贅沢コースお一人4,000円など。徳島大学オリジナルビール「Very Ale」もご用意できます。まずは気軽にお問合せを。

2019年11月2日（土）には、徳島大学創立70周年記念のホームカミングデーイベントとして、渭水会主催で「同窓会in学食」を企画中です（詳細はP51）。ふるってご参加ください。

お問合せ

徳島大学生協同組合 〒770-0814 徳島市南常三島町1-1
TEL 088-652-1073 FAX 088-626-5811 <http://t-coop.com>

ch e c k

常三島ショップ (常三島店)

常三島地区の購買店と書籍店を1つのフロアに統合した店舗です。大学内の最寄り店舗として、文具や書籍を中心とした教材やおにぎり・パン・飲料などの食品を取りそろえています。店舗のカウンターではTOEIC等の試験や講座の受付、旅行関係の取扱い、パソコンのサポート等、大学生に関わる様々なサービスを提供しています。

徳島大学のオリジナルグッズもここで販売しています。学章を刻印した多機能ペンや徳島県産の木材を使用したペン立て、大谷焼のロックグラスや専門店の手焼きせんべい等、お土産や贈り物としてご利用いただいています。



本屋さんがまるごと入ったような書籍コーナー。さすが専門書が充実しています



学生生活に必要なものはなんでも取り扱います



一言カードで商品をリクエストできます。職員さんのコメントが気がきいてます

徳島大学オリジナルグッズ

文房具やTシャツ、トートバッグなどの定番はもちろん、たくさんのオリジナルグッズが制作されています。なかにはこんな商品も！



上勝町の「RISE&WIN」と共同開発したオリジナルビール「Very Ale」(ベリーエール) 648円。軽やかでフルーティな口当たりです

徳島の伝統工芸・大谷焼のロックグラス1,620円。ご両親への贈り物にいかが？



何枚あっても便利なクリアフォルダ103円

徳島大学の焼き印入りのおせんべい。箱入り780円は帰省のおみやげにぴったり



理工学部・生物資源産業学部側

CAFÉ San-Jyo (さんじょ)

総合科学部の敷地から共通講義棟まで続くシンボルストリート沿いにあります。お店で調理したホットサンドやピラフ等、主にテイクアウトできる軽食を提供しています。

ミニショップEmi*re (えみり) 第2食堂creA (クレア)

敷地の北東、工業会館の一角にあります。えみりでは店舗で調理した出来立ての丼を中心に、唐揚げやフライドポテト等の軽食も提供しています。

新連載

①

総科を

～総合科学部の



たずねて

“いま”をご紹介します～

総合科学部2号館での教育研究について

総合科学部准教授 総合科学部横断領域表現研究室

かわらさき たかみつ
河原崎 貴光

私が徳島大学に着任した2007年当時、総合科学部2号館は音楽棟と美術棟があり、主に総合科学部人間社会学科マルチメディアコースの教育と研究の場となっていました。現在でも音響設備が整ったホールや、ピアノが設置された教室、芸術表現に関する実技の為の教室が整備されており、旧音楽棟と美術棟の間には、常三島けやきホールという立派なホールが新設されました。



現在の総合科学部2号館

2018年現在、私は総合科学部社会総合科学科地域創生コースの情報・表現分野で横断領域表現研究室という、メディアアートの制作と研究を主とする研究室を主催しています。着任時の「マルチメディアコース」と比べると芸術表現に関する部署であることがやや判りにくくなってしまいましたが、様々な研究室と協調しやすい環境となりました。私の研究室では「多領域を横断した表現」「未だ分野名のない先端的な表現」の実現を目標としているので、有意義な変革が続いています。近年では地理情報や考古学に関する研究室と共同で、土器や遺跡を3次元情報として保存し共有可能な仕組み作りに取り組んでいます。学生のころから、いわゆる現代美術と呼

ばれる表現を続けており、写真や映像、立体物はもとより、ロボットやインターネット、香料等も作品の素材としてきました。最近は前述の様に地理情報や考古学との協調や、地域社会、イベント企画、ドローンの活用や浸水予測に関する研究等もおこなっており、知人からは表現から退いたのかとも言われますが、自分にとっては表現の幅が広がった結果であり、やっていること、目標とすることは特に変わらず邁進できていると思っています。

教育の成果としては、卒業生の活躍が目覚ましく、出版、映画、放送等を通して伝わってくるのが嬉しく感じます。

勿論在校生も活気があり、作品制作/研究に勤しんでおり、総合科学部2号館近辺では工作をしたりスケッチしたりと学生の制作の様子を毎日見ることができます。コース経費で野外用のベンチを導入したことで制作に関する議論や人生相談まで、学生生活にとって有意義な社交場ともなっています。そういった環境から生まれた発想を基に授業での課題制作や発表も活発で、校舎を使ったプロジェクションマッピングや徳島LEDアートフェスティバルへの



校舎を使ったプロジェクションマッピングの様子

参加など、学内外問わず総合科学部2号館での制作/研究の成果が発揮されています。

特に、大学院で開講しているプロジェクト研究Ⅰという授業では、前期に練った作品制作のプランを後期に学部生と共に実制作し発表するといった実践的なものとなっており、数チームに分かれた学生た

ちが様々な試行錯誤しながらも共同制作による、学生にとっては大規模なプロジェクトに取り組む場所として重要な教育の現場となっています。

座学のみでは得難い多くの事を学ぶ場として今後也有続けていけたらと思っています。

描くことの原点

おだりさ
尾田 理左(旧姓 富士)



卒業して四年になった今でもふと思い出すことがある。徳島駅前の初個展、そして卒業制作展のことだ。

私は日常生活の中で、神秘的で不思議なもの、白昼夢のような風景に得も言われぬ懐かしさを感じることがあり、植物館の通路や路地裏の風景、さびしい海岸にぼつんと佇む灯台、海に映る月の光、川面に映った橋の影などを題材に作品を制作した。展示を控え、一日中キャンバスに向かうのは喜びでもあった。入学前から絵画表現を深めることが第一の目的と言えたので、制作に集中して良い環境というのが嬉しかった。ものを作るには、どんなものでも「生みの苦しみ」を避けては通れない。思うようにいかないことも多く、表したいものを手繰り寄せるにはタイミングが必要なこともあり時間がかかる。しかし、気力と根気のいる作業であることなど気にならず、熱中して取り組んでいたのを覚えている。

展示の後、来場者の方が書いてくれたコメントの中に「なぜか懐かしく感じ、癒された」という言葉を見つけた。コメントしてくれたのは、名前から恐らく外国人の親子だった。受付の係の時、他の来場者の方が出ていった後も展示室の真中にあるソファに腰かけ、しばらくじっと私の作品を見つめていたことを思い出した。

私の卒業制作のテーマは、“「心象風景表現研究」-「大切なもの」の視覚的表現-”というものだった。外界にあるものに触れることで私たちの精神の奥にあるものが引き出される、ということがあ

るが、そのときには一般に「感動」と言われる心の動きが起こり、そのことによって私たちは「大切なもの」に触れ得たと先験的な意識によって認識することができる。人間が、実際に同じ経験はしていなくても、一つの芸術作品によって感動を共有することができるのは、その精神の奥に、個体の違いを超えて共通する部分があるからではないか。つまりある人が心を動かしたものを表現した作品は、それを鑑賞する人々が自らの心の奥にもある「大切なもの」を引き出す契機ともなり得る——という概要だった。

他のコメントにも懐かしさや安らぎという言葉があり、「文化や経験が違ってても、伝わるものは本当にあるのだ」と感じた。そのことが非常に印象に残っていて、今でも支えになっている。

私は思春期頃から徐々に自分のことを話すのが苦手になったように思う。強く想っていることや伝えたいことほど胸がつかえて苦しくなり、言葉がなか



橋のみえる丘絵画賞受賞作品「潮流の島」

なか出てこなくなることがあった。話そうとすると「伝わらない」という思いがずっと押し掛かって来る感じがした。大学時代のはじめの頃は、絵画研究室の批評会で自分の作品について話す時、あきれられるほど言葉が出てくるのに時間がかかったこともあったのを覚えている。

矛盾することや不条理なことがあった時、怒りや憤りや悲しさをどう発散すべきかわからなかったこと。立ちすくむほど美しい景色を目にした時の感動を誰かに伝えたいと思ってもその術がなかったこと。それらにより言葉以外の方法で表現するものに強く惹き付けられ、描くことで自分の感情を収めるようになった。平面に表すことは難しかったが、描くという行為自体には想像を膨らませ、素直に、自由になれる心地良さがあった。絵は自由自在な一つの窓のように感じた。

卒業後二年間働いた後に体調を崩し、現在は結婚して家事をしながら制作をしている。社会人二年目、初個展と同じお店で二度目の個展をさせて頂いた時、制作し続けることの難しさも感じたが、限ら



森珈琲店での二度目の個展の様子

れた時間の中で自分にとって何が大事なのかを考える機会になった。キャンバスに向かう時は「本当に大切なもの」を問われている気持ちになる。迷うことはあるが、喜びを持って描かれた絵は見る人にも伝えられるものがあるということを信じ、純粹に描く喜びを大切にしたいと思う。

(平成26年 総合科学部社会創生学科地域創生コース
絵画表現研究室卒)

社会人になって



せとぐち りょう
瀬戸口 遼

朝6時半、目覚ましのベルが鳴る。体が重い。期限切れの定期券はもう数ヶ月更新していない。今日もまたスーツだらけの満員電車で運ばれ、酒臭い最



所属ゼミでの集合写真

終電車で帰路につく。重い体をベッドから起こしながらそんなことを考えていると、やけに外が静かなことに気づく。線路近いマンションでは10分おきに踏切の音が聞こえるはずなのに。

カーテンを開くとそこには線路はなく、広い駐車場と軽自動車。毎日かざしたsuicaは財布の隅に隠れ、代わりにガソリンスタンドのレシートが重なる。眠気覚ましのコーヒーを飲みながら実感する。僕は徳島へ帰ってきたのだ。

平成25年3月、徳島大学総合科学部社会創生学科地域創生コースを卒業し、5年が経過した。大学卒業後、東京のイベント企画・運営会社に就職。まだまだ歴史の浅い会社ではあったが、「都会ってかっこいい」「ベンチャーってすごい」「イベントってイケてる」といった漠然とした憧れを抱き、社会人

としての第一歩を決めたことを覚えている。

初めて足を踏み入れた社会人の生活は、ベンチャー企業ならではのスピード感と忙しさで目が回る日々だった。入社後早い段階で担当エリアを持ち営業マンとして企画提案をする傍ら、土日はイベントの現場スタッフとして働く。ひとつのイベントの裏にどれだけの苦労があるのか、お客様のありがとうの一言がどれだけ嬉しいか、イベントが成功し喝采を受けることもあれば、ミスが発生しお客様のもとへ何度も何度も謝罪に通ったこともあった。一発勝負の世界の中で、楽しい面も辛い面も経験することができたのは、今の社会人生活での糧となっている。

就職して2年半経った頃、結婚を機に妻の地元であり僕が学生時代を過ごした徳島へ戻り、不動産の営業として仕事を始めた。イベント業のような、多数のお客様に対してではなく、カウンターで1対1で向き合う営業スタイル。不動産というより生活に密着した商品を扱うため、良くも悪くもお客様の本音とぶつかることが多くあったが、そんな中で「瀬戸口さんに任せてよかった」と言っていただけ時は格別に嬉しいものとなった。また、春には徳島大学への進学生も担当。後輩の新たな門出に立ち会えるのはとても感慨深いものだった。

そして現在、私はもう一度転職を経験し、徳島にある機械メーカーで働き始めた。事務職・製造業に初めて携わり、接客業とは異なる新しい働き方に触れている。

ここまで読まれた方の中には、「こいつすぐ転職するな」と感じた方もいるだろう。この5年で2度の転職をし、3つの会社を経験した。僕自身も「普通は3年以上働かなければならない」という考え方を最初は持っていたし、周りの人からは「社会人なのだから辛いのは当たり前」「そんなことじゃこれから逃げの人生になる」等様々な意見をいただいた。しかしざ転職してみると、どうだろうか？結果的に理想的なライフスタイルで生活をおくれている。

2度の転職を経験してのいちばんの驚きは、いまままで「あたりまえ」「普通」と思っていたことが、転職をする度にことごとく変わったことだ。叩き込まれた「普通」は、どこでも通用するものではないし、その「普通」に縛られる必要もない。

何か行動を起こしたり、現状を変えようとする「普通」や「常識」と言った言葉が足を引っ張る。もちろん、他者からのアドバイスであったり心配の声には耳を傾けるべきだ。それを加味した上で最終的には、自分がどうしたいかを大切に、「普通」「常識」にとらわれずに「自分自身で決める」ということが、自分の人生を生きるということではないのだろうか。もちろん失敗するかもしれないし、苦しい思いもするかもしれない。それでもやりたいこと、挑戦したいことにしっかり向き合う。だからこそ私は、今とても楽しく充実している。

車のエンジンをかけ、即座にエアコンをつける。平成最後の夏はとても暑い。会社に向かう道すがら、通学途中の徳大生たちが目に入る。彼らはどんな選択をし、生きていくのだろうか。もしかしたらまた僕も、ハンドルからつり革にまた持ち替える日が来るかもしれない。それまでsuicaは財布にしまっておくのだ。

(平成25年 総合科学部社会創生学科地域創生コース
横断領域表現研究室卒)



徳島空港前にて

一本の筆

たむら みのる しょうかく
田村 實(昇鶴)



昭和27年、教師として第一歩を踏み出しました。毎日、黒板に書く文字…。子供たちに与える影響は…書写・書道教育に取り組む決意をし、昭和28年、再び大学の門をくぐりました。昭和30年4月から再度教壇に立ちました。小学校8年、中学校6年、高等学校17年、書写・書道教育を中心に勤務いたしました。

昭和60年、転期が参りました。書道といえば四国女子大学、四国女子大学といえば書道といわれるほど、名声の高かった四国女子大学に勤めることになりました。文学部国語国文学科書道コースは、全国的に見て数少ない高校書道教員養成機関の一つでした。授業として楷・行・草書法の実技、書論、書写・書道教育法、中国書道史等何科目もあり、無我夢中で教材研究に取り組んだことを思い出します。書理論に立脚した書道実技の修練、漢字と仮名両面の均衡のとれた実力を持つ指導者の養成、個性を重んじた徹底した個人指導等を教育方針として掲げ、今ではほとんど使用されることのない「鍛錬」ということばが、ぴったりするような鍛え方をしてきました。実力養成にはいろんな方法があるが、休暇中

の課題は法帖の「全臨」である。「先生は簡単に「全臨」というけれど…」こんな言葉を聞いた時、「よし!」という気持ちが起こり、「書譜」を画仙紙半折に、「孔子廟堂碑」を半紙に仕上げて口封じをしたことは印象深い。休暇明けの研究室前には提出作品の山で、足の踏み場もないほどになったことは懐かしい思い出です。

講義・実習以外に、資質向上のために計画・実施した特色ある各種行事も数多い。各学年の研修旅行で、文房四宝の製法見学をはじめ、名碑・史蹟、美術館訪問で、広島・奈良・京都・東京・群馬・山梨・長野・新潟等に、寝台夜行列車、新幹線、バスでの強行旅行の車中での語り合いの数々も懐かしい。極楽寺での夏季合宿錬成会、県展、博美展、大学祭、秀美展、学外展、東京書作展、太玄展、卒業制作展等への出品のため、冷暖房のない部屋で夜遅くまで頑張る学生と一緒に取り組んだことも深く心に刻まれています。

一人当たり壁面、10～15メートルに及ぶ教員展の作品制作は、よい刺激になり大変勉強になりました。



「遊於芸」遊びごとに関する芸能。茶の湯、生花、踊り、琴、三味線、笛など

姉妹大学協定を結んでいる米国サギノーバレー州立大学の学生たちと、片言英語で楽しく書道の勉強をしたこともよき思い出の一つです。

校務として、就職課長補佐、教育実習課長補佐、学生募集委員等を拝命し、和歌山・高知を中心に沖縄まで、企業訪問、学校訪問をしたことなど次々によみがえってきます。

平成10年、文学部長職を併任、重職を背負った緊張の日々。任期中の大きな出来事としては、何といても「書道文化学科」の誕生です。平成13年4月、30年の実績を積んできた「書道コース」が「書道文化学科」へと面目一新、「書道文化館」が新築されました。学科誕生に当たり、先生方・事務担当者の昼夜を問わないご労苦は言葉で表わすことが出来ません。ただ頭が下がり感謝の念で一杯です。

新しい時代の書道文化を築くんだと熱気と笑顔にあふれた若い学生から清新なエネルギーをもらい、おかげで元気に20年間も勤めることが出来た今は、いろんな想いが去来し、感無量です。退任を記念しての書作展開催も感慨一入です。故田中双鶴先生をはじめ、良き先輩、良き知友のご指導ご支援ご協力のおかげで、51年間という教員生活に幕を下ろすことになりました。本当にありがとうございました。すべての人に感謝し厚くお礼を申し上げます。

「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり」

(北村西望)

これからは、自己を磨く一本の筆に心を燃やし、より深く、より幅広く、向上に努めたく思います。望み果てない研究の大海へ乗り出した「書道文化」丸の安全航海と、すばらしい成果を強く望んでいます。
(昭和30年 学芸学部4年制小学校課程卒)

※「四国大学書道文化学会」田村 實（昇鶴）教授
退任記念号（2006年3月刊）より転載



「和気満堂」なごやかにむつまじう気分、雰囲気



「徳有鄰」徳は孤ならず。必ず隣有り

研究最前線

平成30年度総合科学
優秀賞受賞者の先生に
ご寄稿いただきました

がん医療従事者のサポートに向けて

総合科学部 社会総合科学科 心身健康コース 福森 崇貴 ふくもり たかき

日本は「がん大国」と言われています。1981年以降、日本人の死因の第1位はがんであり、今や2人に1人が生涯のうちにがんになり、3人に1人ががんで亡くなる時代となっています。そのような背景もあり、わが国では、がん診断時からの緩和ケア提供体制、専門家による支援体制の整備などが進められてきています。しかしその一方で、医療現場を支える医療従事者が強い疲弊やストレスを抱えていることも、多く指摘されるようになってきました。

私にはこれまで、医療従事者の共感スキルトレーニングなどに関わらせていただく機会が何度かありました。また、本学赴任後は、大学病院のがん診療連携センター等で多くの医療従事者と協働してきました。そのような中で漠然と感じていたのは、「共感」という言葉の裏側で、その身を削り、その身を減らす医療従事者が少なからずいるのではないか、ということでした。実際に、医療従事者の離職やアブセンティズム(常習的な欠勤やそれによる損失)は社会的にも問題となっていますし、私も医療現場で、担当のがん患者さんの苦悩や苦痛に影響されて調子を崩していく医療従事者を目にしてきました。そのような状況のもと、私は、「受容・共感」に偏向しがちなコミュニケーション教育の危険性、あるいは、「我が身を犠牲にしても患者を支えなくては」といった、共感に関する偏った信念の危険性を問題意識として抱きつつ、データを元に現状に対して声をあげたいと考えてきました。

今回の総合科学優秀賞受賞の対象の一つとなったPsycho-Oncology誌の論文は、まさにこのことをテーマとしています。人生を脅かすような病気や苦しみを体験している人に関わろう、援助しようとすることで、援助者側にもその人と同じようなネガティブな反応が生じることを「共感疲労」(compassion fatigue)と呼びますが、がん医療従事者のおよそ30%前後が、この共感疲労の高リスク群であることが知られています。共感疲労のリスク要因としては、担当する症例数の多さや職場サポートの少なさに加え、個人的なトラウマ体験などが挙げられて

おり、また、共感疲労と援助者の信念や期待との関連も指摘されています。つまり、共感疲労の発生への認知的要因の関与が示唆されているのです。しかし、共感疲労に関わる認知的要因についての実証研究は国内外を見渡してもほとんど認められていません。そこで、私たちの研究グループでは、がん医療従事者が共感疲労を呈するまでの間にどのような認知的反応が生じているのかを明らかにすることを目的に、がん領域で勤務する看護師を対象としたインタビュー調査を行いました。逐語データを内容分析(content analysis)という質的方法論を用いて分析したところ、認知的反応として11のカテゴリーが特定されました。なかでも相対的に出現頻度が高かったのは、自らの職務能力への疑念や、どのように適切なケアを行えばよいのかについての戸惑いに関する内容から構成される「専門職としての不全感」、自らを患者・家族の立場に置き換えてそのつらさを慮る、彼らの苦痛を頻繁に想像する、といった内容から構成される「患者・家族への思いやり」、そして、できる限り患者・家族の力になりたい、援助のためにもっと患者のことを理解したい、といった内容から構成される「患者・家族への援助欲求」でした。得られた11のカテゴリーを全体的にみると、患者や家族、スタッフへの接近を求める一方で、それらへの不満も募らせる、あるいは、専門職としての使命感に駆られる一方で、専門職としての不全感にも苛まれる、といったように、他者との間および自己内における複数の葛藤の存在が窺われ、そのような葛藤が共感疲労を促進させる一因となっている可能性が示されました。現在は、がん医療従事者の認知面に焦点を当てたサポートに向け、特にどのような認知的反応が共感疲労につながりやすいのかを検討するための量的研究を計画しています。

私の専門である臨床心理学という学問の魅力のひとつは、臨床実践から研究の着想を得、研究成果を臨床実践へ還元し、それをまた研究へ……という循環のプロセスにあると考えています。今後もこのような循環を意識しながら研究・臨床の両面を進めると共に、教育者としてもより一層精進してまいります。

子 供 た ち に つ な ぐ

戦争の記憶

ノンフィクションライター 城戸 久枝 き ど ひさ え



父の半生を10年かけて取材した『あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅』を出版して11年。2018年夏、この本が新たに、新潮文庫で文庫化された。私たち家族の小さな歴史が、また新しい形でつながったことを嬉しく思っている。昨年2月に出版した『黒島の女たち 特攻隊を語り継ぐこと』（文藝春秋）は、1945年4月に、鹿児島沖に浮かぶ黒島に次々と不時着した特攻隊員と、彼らを懸命に看護した島の女性たちとの交流を綴った物語だ。この本のなかで、特に私が描きたかったのは、元特攻隊員の方々と島の人びととの記憶を次の世代につないで行こうと奮闘する人びとの思いだった。一昨年からは、新潮講座で『戦争の記憶を継承する方法』と題して、これまで私が行ってきた取材方法を紹介させていただいている。

あの戦争から73年。戦争体験者から直接話を聞く機会はさらに減り、記憶はうすれていくばかりだ。そんな今、私が特に力を入れて取り組んでいるテーマは、戦争の記憶をどう子供たちにつないでいくのか、ということだ。私には小学2年生の息子がいる。その息子に中国残留孤児だった父の半生を知ってほしい、という思いが芽生えたことがきっかけだった。

息子が保育園の年中組のころから、父の半生を『じいじが迷子になっちゃった話』として、話して聞かせてきた。ただ、幼い息子には戦争があった時代も、大昔も区別がつかないようで、「戦争があった昔って、キョウリュウもいたの?」と聞いたりしていた。それでも何年も続けていくうちに、本人なりに少しずつ理解してくれるようになった。小学校に入学したころから、息子の意識は変わってきた。最初に彼が抱いていた戦争のイメージは「怖い」「かわいそう」なものだった。ところがある日、漫画本でアンネの日記を読んだ彼の中に、生まれて初めて「怒り」の感情があふれてきた。なぜ、何も悪いことをしていない子供が、戦争で殺されなければいけないのか…。その言葉を聞いて、息子にしっかりとじいじの話を聞かせなければ、と改めて強く思ったのだった。

できるだけ早く、この『じいじが迷子になっちゃった』話を見聞書として出版したいというのが今の私の目標だ。毎晩、執筆途中のこの物語を、息子が眠るときに読み聞かせている。息子の反応を見て、よりわかりやすくなる

ように、何度も書き直している。息子に語りかけるときに特に大切にしているのは、あの戦争との距離感をどう認識させるか

ということ。「あなたと同じ7歳のときに、じいじはこんなことをしていたのよ」と息子の現実と父の過去を重ねることで、遠く離れた昔の話と想像していたことが、実は、そんなに離れていないのだ、と感じてほしい、という願いを込めているようで、「本が出ると決まったら、早く言ってね! 図書館の先生に本をおいてもらうように頼んでおくから」と言ってくれている。なんとも頼もしい言葉だ。私たち家族の物語を通じて、息子だけではなく、多くの子供たちに、自分につながる家族の歴史に興味を持ってもらえるようなワークショップを開きたいという目標もある。

千人いれば、千通りの歴史がある。千人いれば、千通りの記憶の継承方法がある。

息子が、そして子供たちが、これから、どのように家族の歴史をつなげていくのか。彼らのこれからを、ずっと見守っていきたいと思っている。

(平成12年 総合科学部人間社会学科日本・東洋地域研究コース[飯森健介先生]卒)



2017年5月、息子も一緒に黒島を訪れ、おばあさんたちから当時の話を聞いた



あの戦争から遠く離れて
私につながる歴史をたどる旅
(2018年 新潮文庫)



黒島の女たち
特攻隊を語り継ぐこと
(2017年 文藝春秋)

[連載⑤]

My Workplace

私の職場

総合科学部が創立されて早や30年余。
国内外を問わず多方面の職場で活躍されている
渕水会々員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、
その職場ならではのエピソードを語っていただきました。

私の職場 [その①]

陶芸家

どこかで繋がる好きなこと

なが お しげ み
長 尾 重 美



昭和が平成に変わった1月、最後の共通一次試験を受けて、徳島大学に入学しました。在学中にバブルが崩壊し、社会に出たころは、「新人類」と呼ばれた世代です。そもそも、窯元の生まれでもなければ、美術専攻でもない、音楽研究室出身の私が、なぜ、陶芸を仕事としているのかとといいますと、ただ単に、好きだったからということに尽きると思います。「新人類」的仕事のやり方なのかもしれません。

大学1年の秋、趣味の陶芸教室に通ったのが始まりでした。卒業してからも、仕事の傍ら、趣味として続けていましたが、30歳を目前に、もっと深めてみたいと思い立ってしまったのです。折しも、京都造形芸術大学の通信教育部が始まり、陶芸コースに入ることにしました。そうは言っても、先立つものも必要です。今の時代、陶芸もずいぶん手軽にできるようにはなりましたが、さすがに好きというだけ

では、授業料も払えませんし、窯も買えません。塾講師や家庭教師、ピアノ講師をしながら、陶芸の世界の奥深くへと入って行き始めました。

しばらくして、結晶釉という釉薬^{ゆうやく}に出会います。独特な調合で、特殊な焼き方をして、陶器の表面に酸化亜鉛の結晶を花のように咲かせる技法です。繊細な釉薬なので、扱っている人も少なく、私なんかには到底できないと、初めは思いました。しかし、文献やネットの情報を漁りながら、初めて調合して焼いてみた器に、2つほど、小さな結晶が浮かび上がってしまったのです。「できるかも?」と思いました。が、そう易々とできるはずもなく…。5年間ぐらいいは、作品らしい作品はできなかったでしょうか。それなのに、一向に駄目な気がしなかったのが不思議です。失敗しても、毎回、次のアイデアが浮かびました。何も策が思いつかなくなったら辞めよ



シリーズPrima (プリマ: 最初に手掛けたシリーズ)

半磁器土を生地に使うので、シャープな中にもまろやかさが出ます



シリーズAqua (アックア: 水のシリーズ)

このシリーズだけ、釉薬が少し違います



シリーズTerra (テッラ:大地のシリーズ)

生地に赤みがかった陶土を使用すると、
同じ調合の釉薬でも色が変わります



シリーズCosmo (コズモ:宇宙のシリーズ)

生地は真っ黒な陶土です。
粘土の成分と反応して、濃いブルーの結晶になります

うと、思っはいたのですが、その策が尽きる前に、綺麗な結晶がはじまりました。

「結晶釉の器 やきもの工房 ちえらみか・しげみ」として活動を始めました。徳島は木工が盛んなので、結晶釉の仏具のオーダーなどもいただくようになりました。全国各地で、私の焼いた仏具がお仏壇に収まっているようです。オンラインショップや、時折、徳島や神戸で開催する個展では、「こんな焼き物は、初めて見た!」という声も多く、嬉しい限りです。もちろん、まだまだ奥は深く、毎回思うように焼けるわけではありませんし、原料のロットが変わっただけで、うまくいかなることもあります。でも、それはそれで、楽しめるようになりました。面白いものです。

思えば、副業があったから、結晶釉の完成に辿り着けたようなものです。その感謝の気持ちも込めて、数年前から、講師としての経験をもとに、小・中学生の受験サポートのブログを綴っています。そうすると、今度は、そのブログを通して、さらに生徒が集まるようになり、誰かの役に立っているのらと思ひ、今も副業は続けています。副業を持っていることを批判されたこともありましたが、今は、自信を持って、これが私のスタイルだと言えます。「新人類」スタイルです(笑)。

高校時代、文系だてらに化学を選択していたおかげで、原料成分のモル比の計算から始まる結晶釉の調合実験は、苦ではありませんでしたし、生み出しは消えていく音楽の世界にいた経験が、作品が残っていく陶芸の世界をより新鮮に感じさせ、言い尽くせないほどの影響を与えています。自分の直感で好きだと感じたことは、思わぬところで繋がるようです。ずいぶん、寄り道や遠回りをしたようにも思いますが、振り返れば、その全てが繋がっています。きっと、今やっていることも、全て未来に繋がるのだらうと思います。そして、そんなことを続けていられる環境と、それを支え、見守ってくださる多くの方々に感謝し、好きなことを生業の一つにできていることに、改めて幸せをかみしめながら、平成の次の時代を迎えようとしています。

(平成5年 総合科学部総合科学科文化コースピークII 音楽研究室卒)

information

● 結晶釉の器 やきもの工房 ちえらみか・しげみ
公式HP: <https://ceramica-shigemi.com>
facebook: <https://www.facebook.com/ceramica.shigemi>
Instagram: [ceramica_shigemi](https://www.instagram.com/ceramica_shigemi)

● 小・中学生の受験奮闘記(徳島版)
<http://tutortokushima.blog.fc2.com>

学芸員

地方自治体の学芸員として ～文化財保護行政の最前線～

北九州市市民文化スポーツ局文化企画課 学芸員 立野 康志郎

福岡県北九州市は、昭和38年（1963）に当時の門司市・小倉市・若松市・八幡市・戸畑市の五市が合併して誕生した九州初の政令指定都市であり、かつての官営八幡製鐵所を擁する北九州工業地帯として発展した都市である。近年は公害を克服し、環境に配慮した循環型社会の実現を目指す「環境未来都市」構想を推進する一方、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」や、市内の戸畑祇園大山笠が構成資産に含まれるユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」を中心に、文化観光のPRにも注力している。

私がこの北九州市の学芸員として働き始めて今年で6年目になる。所属する市民文化スポーツ局文化企画課文化財係は、市域の指定文化財の管理や新たな指定文化財の調査・指定、各種文化財の維持補修や補助金の交付、開発に伴う埋蔵文化財の事前審査や本調査（発掘）など、国の法律や県・市の条例に基づく文化財保護行政事務を所管する部署であり、地域住民や所管地域の文化財と直接相対する文化財保護行政の最前線ともいえる職場である。

さて、このような文化財「保護」行政を担う職場において、近年ある変化が生じている。それは、従来は「保護」中心であった文化財行政が、文化財を「保護しつつ活用も行う」方向へと体制や意識の転換が図られているように感じる。その証左として、



埋蔵文化財発掘調査現場にて



小倉城と筆者

従来は教育委員会に属することが一般的であった文化財所管課が、近年では首長（市の場合は市長）部局で事務を取り扱う地方公共団体が（本市も含め）増えていることが挙げられる。この背景には、従来は教育委員会に属した文化財所管課が、環境、観光部局など地域づくりや街づくりを担う部局（首長部局に所属）と相互連携し、文化・文化財を地域・観光振興の施策に活かすことを目的とした、平成19年の国の地方教育行政に関する法改正に伴う事務所掌の弾力化の動きがある。そして、文化財行政を担う専門職員である地方自治体の学芸員にも、文化や文化財を盲目的に保護するのではなく、如何に他分野とコラボレーションし、地域の魅力向上に寄与するアイデアを生み出せるか、という新たな能力が求められているのである。

平成27年度に国（文化庁）が新たに創設した「日本遺産」認定制度は、地域の文化財や伝統文化をい



日本遺産普及啓発のための市民講座のようす

かに地域活性化や観光客の誘致に活かすか、という観点から制度設計されたものである。日本遺産とは、地域に所在する歴史的・文化的遺産を、その地域の風土に世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえた1つの物語（＝ストーリー）の下に有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらを日本遺産として認定し、その活用を図る中で情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取り組みを効果的に進めていく制度である。本市では関門海峡を挟んだ対岸の下関市と共同で申請し、平成29年度に「関門“ノスタルジック”海峡～時の停車場、近代化の記憶～」というタイトルのストーリーが日本遺産として認定された。現在、私の係では、この日本遺産の普及・啓発活動を積極的に行っており、私も

担当の一人として、外国人観光客を見込んだ文化財説明板の多言語化や、ホームページ等のウェブサイトの制作、サイト内や文化財所在地におけるVR（仮想現実）やAR（拡張現実）などの仕組み作りなど、従来の博物館概論や学芸員実習などでは学ばなかったような業務をおこなっている。

上記のように、文化財行政が「保護」から「活用」へと大きく潮流が転換する中で、多くの他分野の人と接する機会が増えたり、若手職員の意見も反映されやすかったりと、業務内容として刺激を受ける面も多い。一方で、実際の現場で「活用」される文化財を如何に適切に管理し、将来へ引き継いでいくための助言や指導を行う技術や能力もまた、学芸員の伝統的業務の根幹部分として残されている。先人たちが守ってきた貴重な文化財に対し、保護と活用とのせめぎ合いの中で、如何にバランスを保ちつつ時代のニーズに応えるか、文化財保護行政の最前線ではそのような微妙なバランス感覚が求められているように感じる。



日本遺産の構成文化財でもある北九州市の近代建築群

（註）日本遺産と日本遺産「関門“ノスタルジック”海峡」については、下記ウェブサイトを参照されたい。

URL : http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/

（平成17年 総合科学部人間社会学科アジア研究コース卒）

輝く新星

第4回 渭水会 会長賞

平成26年度に創設された「渭水会会長賞」。

これは、研究及び学生としての活動全般において優れた学生に対して贈られるものです。第4回からは、対象を院生にも拡げ、学部生3名・院生1名に贈られることになりました。

平成30年3月23日（金）、総合科学部1号館第2会議室において表彰式が行われました。

平成29年度（第4回）渭水会会長賞の受賞者は

武知 実波さん（大学院総合科学教育部 地域科学専攻地域創生分野）、畑 和実さん（総合理数学科 物質総合コース）
釜江 梨紗さん（社会創生学科 環境共生コース）、橋本顕太郎さん（人間文化学科 国際文化コース）
の4人です。



左から畑さん、武知さん、毛利理事長、釜江さん、橋本さん

サーフィンと共に在る私の生き方



たけち みなみ
武知 実波

私が過ごした徳島大学での6年間は、人生を顧みる際に必ず思い出すでしょう。それほどまでに思い入れのある充実した素晴らしい時間を、ここ徳島大学で経験させていただきました。

私はプロサーファーです。高校3年時に日本プロサーフィン連盟公認プロサーファーとなり、大学時代は世界ツアーを主に転戦しました。授業、課題、練習、遠征。私の大学生活は主にこの4要素によって構成されていたと思います。遠征のために授業を欠席せざるをえないこともありましたが、先生方のサーフィンに対する深いご理解があったおかげで、私は学業とプロ活動をどちらも諦めることなく努力する機会を得ることができました。学生の本分は学ぶことであり、大学進学後、学部では英語教育の分

野に関して学びを深めました。当時は不可能を可能にする想いで学業とプロ活動を両立することを目標に過ごしており、今振り返るとあれほどまでに一生懸命になれた学生生活は宝だと思います。

宝、という言葉が出ましたが、私には大学生活を通して獲得した宝のような経験があります。それは徳島大学サーフィン部の設立、そして部を通して素晴らしい部員たちと出会えたことです。自身が魅せられたサーフィンというスポーツを、西日本のサーフィンのメッカと言われる世界有数のサーフポイントを有する徳島県内で普及させることは極めて重要であると考え、国立大学では稀なサーフィン部を大学公認サークルとして設立するに至りました。しかし、恐らく私をもっとも突き動かしたのは、徳島県出身者の大学生が口にしていた「徳島はなんもないところやからなあ」という一言です。自身の故郷の魅力を知らないまま県外に流出してしまう若者の気持ちを察し危機感と軽いショックを受けた経験が私を動かしました。

今地方では地域の特色を活かした活性化が多く実施されており、それは徳島も例外ではありません。私も遠征等で国内外を回りましたが、地域ごとに美しい場面、他の地域にはない瞬間があるものです。徳島の魅力は多々ありますが、私が体感してきた海からの学び、サーフィンを通じた自然への理解という



徳島大学サーフィン部

のは地域の魅力に含まれると思います、ひとつの地域性としてのサーフィンの可能性をかけて大学院ではサーフィンツーリズムを活かした地域活性化策を研究するに至りました。

私は今、プロツアーを転戦しながら、サーフィンを用いた地域活性化に関する講演活動や行政との対話を通して地域活性化に向けた提案をする機会をいただいています。また教育現場においては講演やサーフィン体験会を実施しており、大学で学んだこと全てが今の私の生活に直結しています。

サーフィンは2020年東京オリンピックの種目となり、今過渡期の最中にいます。メディアではこれまで以上にサーフィンの文字が躍り、テレビ番組でサーファーを見る機会も多くなりました。世の中のスピードは速く私たちはそれに遅れをとらないことに意識が向きがちですが、それと同時に犠牲にしがちなものもあります。後に継承していくべきこと、それは私にとって、サーフィンの魅力であり、郷土愛であり、それを再認識させてくれたのは徳島大学サーフィン部の有志たちとの出会い、そして講演やサーフィン体験会など、考えを共有する機会を得ることができた、その「ラッキー」の連続の末にあると考えています。こんなにも幸運で実り多い大学生活を送ることができたのは、理解ある先生方、友人た



徳島県内の小学校での講演の様子

ち、そして家族のお陰です。最後になりましたが、この度渭水会会長賞という名誉ある賞をいただいたこと、そして想いを発信できるこのような機会をいただけたことを心より感謝します。いただいた賞に値する人となるよう今後も邁進して参ります。

「一度来た波は二度と来ない」サーフィンも人生も同じで、一度過ぎると二度と戻ってくることはありません。その一瞬一瞬に価値付けできるかどうかは自分次第。人生を彩り生き甲斐を与えてくれたサーフィンに恩返しすることが当面私の人生のテーマとなりそうです。

(平成28年 総合科学部人間文化学科国際文化コース卒)

(平成30年 大学院総合科学教育部地域科学専攻地域創生分野修了)

★ 知りたいことを知るために

大学院総合科学教育部地域科学専攻 量子科学研究室

はた かずみ
畑 和実



大学生活を振り返ると勉強、部活、サークル、バイトと様々なことを経験し、また学部学科、大学を問わず沢山の方と出会えた4年間でした。4年間の中で一番印象に残っているのは4年生の1年間です。

遡ること高校1年生の冬、インターネットで近日ふたご座流星群が見られるという記事を見つけ、その日、“本当に流れ星なんて見られるのか”と半信半疑で家の窓から空を眺めました。そして星が流れるのを初めて見た時、それまで別世界のことのよう感じていた「宇宙」を身近に感じ、宇宙にとっても惹かれました。また、幼少期から、“自分とは何か、なぜものが存在しているのか、全ての始まりは

どこか、何から生まれたのか”とふと思い、不思議な気持ちになることが度々ありました。その答えが宇宙にあるのではと思い、“宇宙の始まり”について知りたいと考えるようになりました。

大学受験の時、徳島大学について調べ、宇宙について研究されている伏見賢一教授や折戸玲子講師がいらっしゃると知り、受験生の時から行きたい研究室は量子科学研究室でした。その後無事に徳島大学に入学し、4年生になると念願の量子科学研究室に配属され卒業研究を行いました。

人間や地球のような元素でできている通常の物質と呼ばれるものは宇宙の構成比の5%しかありません。宇宙の構成比の27%は宇宙暗黒物質、68%は宇宙



物理研究室の先輩と同期

暗黒エネルギーと呼ばれるものです。宇宙暗黒物質とは、目に見えない未知の素粒子で、その要求される性質として、電氣的に中性、かつ質量を持ち安定な状態で存在することが挙げられます。徳島大学の量子科学研究室は宇宙暗黒物質探索のために、PICOLON (Pure Inorganic Crystal Observatory for LOW-background Neutr (al) ino) という高純度NaI (Tl) シンチレータを開発中です。シンチレータとは放射線が入射するとほんのわずかな時間だけ蛍光を発生させる物質です。このNaI (Tl) シンチレータに宇宙暗黒物質が入射すると、原子核に衝突し原子核を弾き飛ばす、原子核反跳はんちょうが起こります。この反跳原子核により、青色の発光が生じ、この光を光電子増倍管で検出します。私の卒業研究では、このNaI (Tl) シンチレータにAm/Be中性子線源を照射することにより、宇宙暗黒物質と同様に中性で質量を持つ中性子を使って、宇宙暗黒物質による原子核反跳を模した実験を行いました。

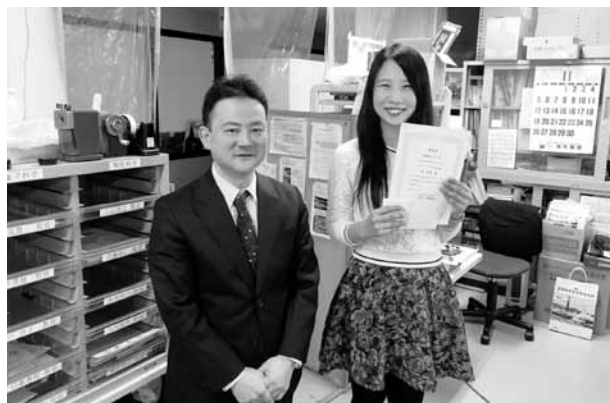
自分で機械を触って測定回路を組んでデータを取得し、自分で作成したプログラムを使って解析することがとても楽しく、実際に宇宙暗黒物質探索に使われるNaI (Tl) 検出器の開発に携わる研究ができ、とてもやりがいを感じています。毎週行われる

ミーティングでは先生方にとっても細かく研究についてご指摘やご指導を頂き、また、4年生の11月には山形で行われたSMART2017というシンチレータ研究会に参加し、初めて自分の研究について徳島大学外の方にポスターで発表する機会を頂きました。とても緊張しましたが、自分の研究を人に説明する、どれだけ自分が理解できているかを再確認する良い機会を頂き、とても恵まれた環境にいることを嬉しく思います。

物質総合コースは卒業しましたが徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻に進学致しました。大学院入試前は研究を進めながら時間を見つけて受験勉強をするのが辛く、何度も掛けそうになりましたが、友人や研究室の先輩、先生方のお支えがあってこそ今の自分がいます。現在は同じく大学院に進学した友人や研究室の先輩、後輩から良い刺激を頂きながら、授業や研究に取り組んでいます。

最後になりましたが、渭水会会長賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。振り返ってみるとあつという間の4年間でしたが、徳島大学に入学して本当に良かったと思っています。今後も精進していきます。ありがとうございました。

(平成30年 総合科学部総合理数学科物質総合コース卒)



SMART2017にて最優秀ポスター賞を受賞(左:伏見賢一教授)

★「悔しさ」と「満足」

私は、平成25年4月に徳島大学総合科学部に入学致しました。大学時代は国際交流に力を入れ、外国人留学生と語学を学びたい日本人学生をつなぐサ

ポーター役として大学生活を過ごしました。

大学時代の先輩や後輩に「英語がとても上手だね」と言われることがよくあるのですが、私は決して

はしもと けんたろう
橋本 顕太郎

最初から上手く話せたわけではございません。今の語学力を身に付けるまでに様々な経験や困難がありました。それらを乗り越えるうえで私が大切にしてきたものをこの大学生活で身に付けることができました。またそれは、社会人となった今でも有用なものとなっております。

1年次は社会創生学科に所属しており、卒業した学科とは異なる学科でございます。1年次の頃から語学に興味を持っていましたので、語学の勉強を本格的に行える人間文化学科への転学科を希望しておりました。したがって、1年次後期が終わるころには無事転学科が認められ、第1の夢を叶えることができました。

語学に興味を持っているだけであって、語学が得意というわけではありません。リーディングやリスニング、いわゆるインプットの技能は、問題集をすればするほど自分の実力が上がっていると確認できました。しかし、スピーキングやライティング、いわゆるアウトプットの技能は全くと言っていいほどできませんでした。大学内にECR（English Chat Room：英会話教室）があったのにも関わらず、1回もそこに行ったことはございませんでした。さらに、人間文化学科には語学が得意な学生が多く所属しており、自分との実力の差を見せつけられました。2年次になって無事転学科できたことに対しての奢りが私にはあったと今では思います。結果として、3年次の留学時には大変な思いをすることが多くありました。

3年次にはカナダのケベック州にあるビショップス大学へ2015年8月25日から2016年4月30日の8ヶ月間留学致しました。



8ヶ月同じ部屋で過ごしたルームメイト

留学手続き、入国手続きなど自分がしていること全てが初めての経験であり、何をすべきかわからない状態で留学に臨みました。準備不足は留学先の大学生活へも影響します。現地の学生と他の



カナダで作った一番の友人との写真

国からの留学生の会話内容が全く理解できず、人といってもずっと黙っているという状態でした。留学して3年ほど経ちますが、今現在でも連絡を取り合っている大親友のカナダ人から「ケン（留学先での私の呼び名）はYes, No, One more beer（ビールもう一杯）しか言わなかったよね」と留学当初言われたのを今でも覚えています。その当時の私は「悔しい」という気持ちを強く持っていました。「このままでは何も変わらない」という思いが起爆剤となり、留学先での私の行動に影響を及ぼしました。留学中できるだけ多くの人と会話をし、自身の語学力を向上させると共に、知識や価値観、世界観を深めることもできました。

帰国した後は、外国人留学生と日本人学生をつなぐ国際交流サポーターとして在籍し、自分の思いが伝わる楽しさや感動を覚えてもらう活動を多く行いました。その原動力としての「悔しい」という思いを抱くことは帰国後幾度かございましたが、同時にもう一つ別の思いも抱いていたと自負しております。その思いとは「今のままで満足したくない」というものです。先にも述べましたように、多くの方々から「英語が上手だね」と言われます。しかし決して今の語学力で「満足」はしておりません。「自分より上手な人はたくさんいる」「自分なら更に語学力を高められる」「改善の余地があるはずだ」というように、常に向上心を持って勉強に励むことができました。

この「悔しい」「満足したくない」という思いは社会人となった今でも大切だと考えております。入社して間もないため、わからないことやできないことは多くあります。そこで「わからなくて悔しい」「このままでは終われない。満足したくない」という思いは今でも私の原動力となっており、いち早く

仕事を覚えられるよう退勤後に1日の振り返りを行っています。人によって何が原動力かは異なりますが、「悔しさ」と「今のままで満足したくない」

という思いは、意欲を駆り立て、次に繋がる大切な一つのステップになると私は考えております。

(平成30年 総合科学部人間文化学科国際文化コース卒)

★ 大学での経験と新たな挑戦

かま え り さ
釜江 梨紗

私が大学生生活を振り返った時に一番に思い出すのは、2年生後期から卒業するまでお世話になった研究室で過ごした日々です。指導教員の研究基盤が生理学・薬理学で、それに準じ私は身近な化学物質の危険性を研究しました。私たちは多くの化学物質に囲まれて生活を営んでいるので、安全で安心できる社会を創り上げる上で化学物質の安全性の確保は必要不可欠ですが、身近な化学物質でさえ安全性評価が十分であるとは言えません。そこで、卒業研究では、コーヒーストド豆焙煎時に産生されるヒドロキシヒドロキノンという物質の細胞レベルでの毒性を検討しました。ヒドロキシヒドロキノンは一杯のコーヒーに数ミリグラム含まれており、細胞レベルの実験ではラットのリンパ細胞内のカルシウムイオン濃度を上昇させるので、ヒドロキシヒドロキノンはカルシウム濃度に依存する生理機能を変化させる可能性があるという結果を得ました。この成果は筆頭著者論文として、在学中には他の研究も行いましたので合計2編が国際学術誌に掲載されるという貴重な経験をしました。

以上の経験より、基礎医学研究に強い興味を持つようになりましたが、現在の私はというと兵庫県にある高等専門学校いわゆる高専というところで職員として働いています。因みに、高専とは、中学校卒業生を受け入れ5年間で主に技術者の育成をしている教育機関です。職員の募集があることを知って高専というものを調べてみると高校と大学を融合させたような独特な学校であることが分かり興味を持ちました。大学卒業後の進路を考え始めた時には考えてもみなかったところですが、新しい場所で挑戦してみたく今に至ります。

4月に学生課に配属されて数か月、学生関係や教務関係の仕事をしています。主には、就職、インターンシップ、留学生、TOEIC関係と多岐にわたる業務

を担当させていただいております。今まで関わってきた分野とは全然違う関係の仕事をしていますが、敢えて違う方面に進んでみると、自分の弱みを発見して克服していくという良い経験ができています。つい最近まで学生だった私が職員の立場になって学生に接するなど慣れないことも多々ありますが、大学時代に実験・研究を行う過程で培った「課題を見つけて1つずつ解決していく」ということが私が物事を考える上での土台となっているので乗り越えることができます。就職をゴールとは思っていません。これからも挑戦を続けていきたいです。

最後になりましたが、渭水会会長賞をいただき光栄に思います。そして、この度渭水会会報に寄稿できるという機会を与えてくださりましてありがとうございます。これからも精進してまいります。

(平成30年 総合科学部社会創生学科環境共生コース卒)

徳島大学総合科学部渭水会会長賞表彰要項

(目的)

第1条 研究活動及び学生としての活動全般について優れた者を表彰する。

(表彰人数)

第2条 学部生3名、院生1名とする。

(表彰者の選考)

第3条 学部生は4年次前期終了、院生は修了・退学時の前期終了までの研究活動・社会活動・成績等に基づいて行う。

第4条 次の基準に該当するもの。

- (1) 研究活動・社会活動等で優れた業績を有する者
- (2) GPA上位者

(表彰の決定)

第5条 表彰の決定は、学部長が招集する選考委員会で協議し、渭水会会長に推薦し、決定する。

(表彰の時期等)

第6条 表彰は、学部生においては4年次後期、院生においては修了・退学時の後期に渭水会会長が行う。

副賞として1名につき5万円を給する。

(要項の改廃)

第7条 この要項の改廃は、総会の議によって行うものとする。

附 記 平成29年5月27日(土)の総会で決定し、平成29年度より実施する。

総科のおたから

其ノ六

昭和36年徳島大学
学芸学部乃図

みね さちこ
峯 幸子

渭水会々報7号の表紙に掲載された頃から長い間いつも気に掛かっていた作品にようやく会うことが叶い、とても幸せに感じています。その絵は総合科学部の学部長室脇の廊下^{よしだまさのり}にあり、「S36徳島大学学芸学部乃図」吉田昌功 1975～78年教官を勤められたとあります。65×100cm程でM40号かと思われましたが、先生のオリジナルかもしれません。驚いたことに先生の御意志なのでしょうかガラスや塩ビ板はなく、それ故に臨場感、一体感は素晴らしく色彩も褪せることなく光を放っていました。淡暗い廊下にここだけがポツと輝いて、柔らかな空気に包まれています。芸術は技術(メティエ)の上に成立するとの持論でしたが、その中には準備、^{こしら}拵えという仕事があり、取材し、スケッチし、写真や文献など様々な下準備があって、その上で構成し、エスキース(下絵)を描

き、キャンバスや絵具の周到な拵えがあって作画へと進むのです。先生は徳島の風景を数点描かれていますが、城山の全景、眉山山頂からの吉野川河口、白壁の土蔵は特に忘れがたく、斬新で風格のある美しい作品です。退官される1978年に郷土文化会館で開催された作品展は本とうに圧倒的で深く心に刻み込まれています。堅牢な画面というお考えはこれらの作品に反映されていますが、個性的で大胆な技法も施されており、学部の図では40年の時を超えて退色、変質なく美しい風合いを保ち続け、小さな凸凹がヒビ割れることなく軽やかに立体感を演出していて驚くばかりです。徳大での御指導は短いものでしたが絵画研究室での充実した日々を思い出すにつれ、後に続く人達に少しでもお伝え出来ればと思っています。

(昭和52年 教育学部中学校課程美術研究室卒)



「昭和36年徳島大学学芸学部乃図」 油彩
吉田昌功氏(1975年～1978年絵画教官)

今も学部長室脇の廊下に掲げられています



「城山より師範学校を望む(昭和8年頃)」 油彩
永山隆二氏(1937年徳島師範学校卒)

吉田氏の絵画と並んで展示されています



|エ|ッ|セ|イ|

子どもが演じる阿波の国子ども歌舞伎

せ と まさ こ
瀬 戸 昌 子

「子どもって素晴らしい。凄い。ずっと続けて欲しい」——子どもたちが演じ手となって歌舞伎公演を行った時の評価です。

阿波の国子ども歌舞伎は、徳島県内の子どもたちに日本の伝統文化である歌舞伎に親しみ、かつ、生で演じる体験する機会をつくり、子どもたちの豊かな感性を育み、可能性を大きく広げ、さらには、徳島県の文化振興に寄与することを目的として立ち上げました。

平成24年にこの目的を達成するために、特定非営利活動法人とくしま傾く会の事業のひとつとして、阿波の国子ども歌舞伎を立ち上げ、現役プロの歌舞伎の演出・脚本家の指導を受け、あわぎんホールで旗揚げ公演を行い、次年度には、「歌舞伎楽器を体験しよう」という内容のワークショップを鴨島公民館で開催しました。さらに、平成26年度には2回目子ども歌舞伎公演を開催しました。すばらしい好評を得て、演じた子どもたちには大きな自信につながり、歌舞伎に高い関心を持ち、伝統芸能のもつ芸術性を習得するに至るといふ大きな成果を挙げました。今後も、目的達成のために、3回目、4回目・・・と事業を続けたいと考えていました。

ところが、母体である特定非営利活動法人とくしま傾く会が平成28年3月31日で解散となり、子ども歌舞



第2回公演は歌舞伎の人気演目『身替座禅』を上演。
大名と奥方、太郎冠者のかけひきが楽しい

伎公演ができなくなる状態となりました。しかし、阿波の国子ども歌舞伎は徳島の文化のために、残してほしいという声を多くいただきました。それで、とくしま傾く会が取り組んでいた子ども歌舞伎を特化して平成28年8月に「NPO法人阿波の国子ども歌舞伎」を立ち上げ、理事長として取り組むことにしました。

指導してくださるのは、初回から指導してくださっている松竹株式会社関西演劇部の水口一夫先生です。衣裳・髪・化粧も本物です。また、舞台も本物です。

NPOとして承認されて、初めての公演を平成29年の第3回阿波の国子ども歌舞伎の公演をしました。～再び感動を分かち合おう～として6人の子どもたちで開催しました。今回もあわぎんホールの会場が満席となり、観てくださった方々や各方面から好評を得ることができ、今後の大きな励みとなりました。公演に際し、たくさんの方々子どもたちを支えよう、子ども歌舞伎を見守ろうという協力や応援があったからこそ、成功裏に繋がったと思います。子どもたちにも、大勢の人たちのお蔭で出来上がったことを伝えていくべきと考えているし、伝えています。

今後、より増幅した、スキルアップした子ども歌舞伎公演をめざし、日本の伝統文化に対する次世代の担い手を育成するとともに、青少年の健全育成に努めたい



第1回公演『どんどろ大師』。
人形浄瑠璃でもおなじみのお弓とお鶴の情愛が胸をうつ



第2回公演を終えて。指導の水口一夫先生（左から3人目）と出演者

と考えています。

また、徳島県に阿波踊りや人形浄瑠璃があるように、阿波の国子ども歌舞伎が徳島県の文化となるよう子どもたちが舞う徳島独自の「阿波の国子ども^{さんばそう}歌舞伎」を考えています。「阿波の国子ども歌舞伎あり」となるよう精進したいと考えており、同時に徳島県の文化振興に寄与することに努めていきたいと思っています。

（昭和44年 学芸学部小学校課程歴史教室卒）



裏方スタッフとして公演を支えます。左から3人目が瀬戸さん



華やかな幟が公演を盛り上げます



2017年に第3回公演を開催。
『新版歌祭文 野崎村』を上演しました



|エ|ッ|セ|イ|

我が人生



おか だ とし ひろ
岡 田 年 弘



NPO法人 江川エコフレンドのメンバーとして、毎月1日の早朝、江川湧水源の清掃活動に汗を流しています

徳大学芸学部時代には、児童文化研究部に入り、市内の子ども会の世話をし、夏休みには山間僻地へ行き人形劇などの巡回公演やサマースクールなどを通して、子どもたちの心に寄り添う大切さなど多くのことを学んだ。この部活動が私の教師生活に大きな影響を与えてくれた。

教員としての出発は一字中学校で、子どもたちや保護者の願いに応える使命を学ぶことが出来た。

教員生活38年の中、中学校9校、県教委、小学校2校の12カ所で勤務した。どの勤務先でもその職場・地域のため全力で勤務することを心がけた。その過程で、短期海外派遣・国内留学・社会教育主事講習・中央研修の機会を持つことが出来た。また、



江川奉仕橋かもクラブ(岡田年弘事務局)の仲間たちと

三木康楽会賞を2度受賞したことも良き思い出である。

退職後は、地域や社会に役立つことをしたいとの思いから、災害救援活動をするため県防災センターの全ての研修に参加し、「災害ボランティア徳島の風」に入って、県内外の被災地の救援活動や県下各地で災害への備えやその対応について話して回ったのは14～15年前のことである。また、地元では地区社協会長を9年、県人権擁護委員も9年勤めさせていただいた。

一方、教え子に頼まれ、指定管理の鴨島公民館・老人福祉センター館長を引き受けて現在13年になる。職員7名で地域の社会教育・生涯学習で、不易と流行を年頭に置き、願いに応えた講座を心がけている。それまでは、来館者が2万3千余人に対し、今では8万3千人を超えている。講座も14講座から現在54講座、年間530回余を開いている。また、貸し館や615席のホールも運営の仕事である。

教師時代の経営方法や職員の提案・特技・才能を生かし、一丸となって「社会教育・趣味・教養・人権・健康・福祉・郷土の伝統や歴史・子育て・子どもたちへの学習支援など」受講者のニーズを調べ、マンネリ化しない創造的な講座を組み立てている。さらに、利用者の達成感や満足感が得られる工夫やサービス精神・安心安全への意識はいつも全職員と共有している。

また、現在、県公民館連絡協議会副会長として、来年秋行われる全国公民館研究集会徳島大会の成功をめざして、県教委や役員と一緒に準備を進めている。

その他、地元では、仲間たちと「NPO法人江川エコフレンド」「江川奉仕橋かもクラブ」を結成し、16年前から徳島県天然記念物・江川湧水源の清掃美化保全活動を行っています。荒廃した河川敷の雑草を刈り、川底のヘドロで400mの花壇を造り、花咲く憩いの場を作り、「ユリの花祭り」などのイベントも行っている。

その他、数年前からJR鴨島駅前を拠点としたまちづくりグループ「駅前まちづくり会議」に参加し、新しい賑わいの鴨島駅前の活性化にも取り組んでいる。

これまで多くの方々に支えられ協力していただいていることを深く感謝し、実り多い人生だったと自分自身が思えるように歩んでいきたい。

(昭和39年 学芸学部4年制小学校課程卒)



江川を人々が集う憩いの場所にしたいと、清掃、花植えなどの活動を行っています



|エ|ッ|セ|イ|

草創期の恩師を偲んで

やま だ ひで お
山 田 秀 雄

ロンドン橋が取り払われたのは1968年（昭43年）であった。米国マクローチ石油会社が8億余の金をかけて買取った上、アリゾナ砂漠の真っ只中、コロラド川近くのレイクハヴァス市にもって行ったのである。そこで運河を掘って湖水を導入し人工の島を造成して一大観光地を建設、世界の観光客を集めようという計画を進めた。

大英帝国150年の栄光を司祭したロンドン橋を、アメリカは言わば客引きとして取り込んで、観光地の人工川に架けられてしまったわけである。

宝亀莞爾先生は瀟洒な長身を詰め襟の国民服に包んだ東大の英文科御出身の逸材で、県立学校長や県教育研究所長などを歴任された教育界の重鎮ということであった。

先生は「シェイクスピアならば、チャールズ・ラム姉弟の「沙翁物語」に20篇ほどあるから、それが手頃でいいだろうね」と薦めて下さった。少年少女のための物語とはいふものの、僕たちにはそれほど手軽でもなく、さすがに筋も複雑で構文も長く、やはり難解であった。

先生はそのラムに傾倒され、特に「エリア随筆」について思索を深めておられるようであった。

昭和26年、故郷の鹿児島大学へ転勤された折、その「エリア随筆」における真髓とも言うべき次の一句を記念として残された。

I Love a Fool. C. Lamb

チャールズ・ラムがそうであったように、蒲池正紀先生はエリザベス朝の文学研究に生涯を捧げられた。

宝亀莞爾先生もラムの研究に没頭されたという意味で殆ど同じ人生を歩まれたと言える。

両先生は何れも南九州の熊本と鹿児島県の御出身であり乍ら同じ英文学を通して徳島大学の学生のために尽くして下さったという意味で私たちにあって偉大な恩人と言わなければならない。

栗津龍智先生は講義の中で、ライプニッツの「予定調和」という言葉を折りにふれては述べられ、又板書も繰り返されておられた。しかしこの言葉も当時の自分たちにはやはり理解を越えたものがあつた。

『小賢しきが如何に争えど、神やがて愚者をこそ嘉し給い、世は全て事なきが如く、必ずや復させ給うべし』

完。

(昭和28年 学芸学部4年制中学校課程音楽教室卒)

徳島大学四小三八会研修会及び同窓会

三八会 よし だ ひろ こ
吉 田 裕 子

「喜寿まで頑張ってみよう」をスローガンに50才の時にスタートした徳大四小三八会の同窓会も早や30年を迎えようとしている。

会の中身も現役時代の親交と徳島の教育を考える会からスタートして、今年は認知症に挑戦するテーマに変遷して来た。76名の同窓中11名がすでに他界しているとは言え、なおお元気なクラスである。今回も3分の1に当たる21名の参加率は、誇りにできるチームである。

折角集まったのだから、一時間は勉強しよう……の今年、萬玉会員の「明治維新の京都」を中心に、龍馬や当時の社寺・城・川・町並・人の生活風情に視点を置いた今までの研究成果を発表した。時よろしく来春には「西郷どん」のTV番組も放送されるとかで、まさにタイミングもよく、その内容に「なるほど、そうだったのか」の声がかかれたのも、研究の緻密さと正確さを立証したものだった。

とび入りの村松会員による「源氏物語詳説」は時代背景と生活様式をつかむのが大変だったが、高校国語

教師をしていた彼の詳解にうなづき、何事にもいろいろ解釈の仕方のあることを印象づけられた。

多肉植物ブームのこの時期、近清会員による「多肉植物のすすめ」は認知症をのり切るにはうってつけの活動で、各人に5株（計28種105株・鉢）のプレゼントは会員に育てる意欲と立ち向かう姿勢を決定づけてくれた認知症対策であった。来春からの子育てが楽しみである。

ともあれ、渭水会に助成いただいての我々のこの会は、生きる喜びに生き、感謝の念ひとしおである。

喜寿以後、毎年開催している同窓会も、地区役員の電話作戦による案内に変更して成果をあげているだけに、傘寿までは、この様式で実行したいと思っている。

（昭和38年 学芸学部4年制小学校課程卒）

研修会・同窓会

日 時 平成29年11月26日（日）

場 所 ホテルクレメント徳島

研修内容 「認知症を翔て越える」



徳島市退職校長会講演会

ふじ た まさ はる
藤 田 正 治

徳島市退職校長会は、会員の研修と相互の親睦を図り、併せて本市の教育振興に寄与することを目的として活動を続けています。主な活動として、「総会・新入会員歓迎会」「叙勲・大臣表彰（章）等祝賀会並びに講演会」に加え、教育支援部が中心になって、子ども支援活動を行っています。

「歩く遍路遠足サポート事業」として、学校行事の遠足のお手伝いをしています。

世界に誇る文化遺産である四国八十八か所のお寺を訪ねることで、身近のすばらしい先人の歩みを理解するとともに、それを守り、自らのことばで世界に発信できる子どもの育成に寄与しています。

同時に、子どもたちと「同行二人」、共に歩くことで、子どもたちの体力向上、私たち会員の体力維持の一助になればとも考えております。

さらに、会員の絆を深めるための活動として、「いきいきサロン」を実施し、会員相互の親睦・情報交換にも努めています。

では、今年度開催の「祝賀会・講演会」での「講演」について次のご報告いたします。

1. 期日 平成29年12月10日（日）
2. 会場 ホテルグランドパレス徳島
3. 演題

「中国における植林ボランティアで得たもの」

4. 講師 岩佐 重明 氏

5. 講演要旨 下記のとおり

★砂漠植林と烏雲先生

ボランティア協会がホルチン砂漠で緑化活動を開始したのは、ひとりの戦争残留孤児女性との出会い、その生き方に共鳴したことがきっかけでした。その方は日中合作テレビドラマ「大草原に還る日」(NHK)のモデルにもなった烏雲(ウユン)さん(日本名=立花珠美さん)です。(徳島市国府町東黒田=北井上出身)育ててくれた中国の人たちに恩返しをしたいとの理由で残留しました。

★ホルチン砂漠

1997年以降、庫倫旗のホルチン砂漠で500万ha緑化、その後他の場所で緑化。



★高収入を得られるカシミヤを作るため、羊を放牧するようになると、モンゴルには植林文化がなかったので、砂漠化が進んだ。

★国と国には国境はあっても、人と人との間には国境がないので、草の根の活動が友好的な関係を作ることができる。



《参加者の感想》

植林ボランティアをずっと継続されてきたことに感謝いたしました。今後この活動がますます盛んになり、砂漠の緑化が進められることを切望しています。

(昭和53年 教育学部中学校課程地学教室卒)

第3回阿波の国子ども歌舞伎公演 ～再び感動を分かち合おう～

NPO法人阿波の国子ども歌舞伎は徳島県内の子どもたちを公募し、子どもたちが歌舞伎に触れ、体験し、生で演じることによって、子どもたちの豊かな感性を育み、子どもたちの持っている可能性を大きく広げ、さらに、徳島県の文化振興に寄与すると共に、日本の伝統文化に対する次世代の担い手を育成することにより、青少年の健全育成に努めることを目標としています。

第3回阿波の国子ども歌舞伎公演は平成29年度に次のような公演を行いました。

活動実施日 平成29年12月23日(土)

場 所 あわぎんホール 一階大ホール
平成29年6月よりおよそ20日間の稽古



せ と ま さ こ
瀬 戸 昌 子

内 容

- 1 口上 (小学5年生 1名)
- 2 演目解説 (水口一夫氏)
- 3 新版歌祭文 野崎村公演
(小学3年生から6年生 6名)
指導 水口一夫
(大阪松竹株式会社関西演劇部)

出 場

県内子どもたち



成 果

あわぎんホールいっぱいの観客の前で子どもたちはわずか20日間の稽古で、しかも、今回の公演内容は義理と人情が交錯する涙・涙の物語で大変難しかったですが、子どもたちは難しい所作・せりふを習得し、力を合わせ一つのものを作りあげ大きな成果をあげました。今回、初めて体験した小学3年生も楽しかったとの感想でした。

観てくださった方も「子どもって凄いね。また、観たいね。これからはがんばって。」と、言ってくださり、徳島県の文化振興に少しでも寄与できたかな

と思っています。

今後のビジョン

子どもたちが歌舞伎を演じるというこの事業は、徳島県唯一の取り組みです。公演できる喜びと感動を改めてみんなで分かち合い、今後もよりスキルアップして、さらに、日本の伝統文化に対する次世代の担い手を育成するとともに、青少年の健全に努めたいと思います。

平成31年12月にも第4回公演を行う予定です。皆様方のご支援・ご協力をお願いいたします。

(昭和44年 学芸学部小学校課程歴史教室卒)

高校・特別支援学校総会並びに講演会

部会長 たけ
竹 うち
内 けい
圭 ぞう
三

平成30年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成30年8月19日（日）に、ホテルグランドパレス徳島にて行われました。当日は、渭水会から、濱尾巧久会長様をはじめ、秋山賢治副会長様、毛利久康理事長様にご臨席を賜るとともに、顧問の皆様、高校・特別支援学校会員の皆様のご出席のもと盛大に開催することができました。

総会では、平成29年度の会務報告・決算報告の後、平成30年度の役員選出、会務計画・予算案についての審議を行いました。会務報告・決算報告・会務計画・予算案については、事務局提案のとおり承認されました。

平成30年度の役員については、現職の校長が副会長に、現職の副校長・教頭が監事に、退職された校長先生方には顧問に就任していただくことで了承されました。また、今回の総会において次期部会長として、徳島県立鳴門高等学校の山村啓治校長先生を選出し、ご快諾いただきました。



総会の様子

また、総会終了後には、徳島大学大学開放実践センター・徳島大学大学院総合科学研究部 教授 田中俊夫先生を講師にお招きし、「健康寿命を延ばす運動 ～理論と実践を通して～」を演題に、ご講演をいただきました。



講師：田中 俊夫 先生

今や徳島県民の健康を考える上でなくてはならない存在である田中先生。講演出席者は一応に興味津々で、会場は講演前から熱気に包まれていました。田中先生のお話しは、スライドとビデオ・実践演習を織り交ぜた内容で、その軽妙な語り口も相まって、あっという間の80分でした。

はじめに、2016年の健康寿命調査をもとに、平均寿命世界第2位の日本ではあるが、決して幸せとは言えない現状を「平均寿命 - 健康寿命」で求められる「不健康期間」の長さを示しながら説明頂きました。男性で9年、女性では12年にも及ぶ不健康期間。（寝たきりや認知症、健康上の問題で日常生活が制限される期間）その長さにとただただ驚かされました。

しかし、田中先生は不安がることなく立ち向かう方法、積極的に健康寿命を延ばす方法をご教授くださいました。一番の方法は歩く。生活習慣病、メタボ予防のために歩く。1日8000歩以上歩いて健康寿命を延ばす。毎日の歩数にプラス1000歩することで、1年間で体重を1kg減少できることに加え、「フルマラソン完走」「歩き遍路」「日本百名山登山」など、田中先生が現在取り組んでおられる「シニアのわくわくチャレンジ」についてもご説明頂きました。

さらに、積極的に健康寿命を延ばすためには脳トレ・筋トレ・バランストレーニングが必要であり、そのために「阿波踊り体操」は最適な運動であることを、実践演習を交えてご教授頂きました。

最後に「膝上げて、腰下げて、健康寿命を延ばしましょう」「貯金は使うと無くなるが、貯筋は使うと増えていく」との言葉をいただき、和やかな雰囲気の中、有意義な講演会を閉じました。

事務局 徳島県立池田高等学校校長
会 長 竹内 圭三

次期会長 山村 啓治
(徳島県立鳴門高校校長：昭和57年卒業)

総会・講演会・懇親会

日 時 平成30年8月19日(日)
場 所 ホテル グランドパレス徳島
講演会 講師：徳島大学大学開放実践センター
徳島大学大学院総合科学研究部
教授 田中 俊夫 氏
演 題 「健康寿命を延ばす運動～理論と実践を通して～」
(昭和57年 教育学部中学校教員養成課程卒)

徳島大学四小課程(昭和39年卒業) 研修会及び同窓会

おか だ とし ひろ
岡 田 年 弘

私たちは昭和39年3月徳島大学学芸学部を卒業し、県内外の小中学校教員として奉職した。今でも55年前の新採での僻地勤務をはじめ、教え子たちの顔がその当時の子どもの顔で浮かび任務地での懐かしい教育活動や子どもたちとの思い出がよみがえってくる。

私たちは、先輩や管理職の日々の姿や様々な研修を通して、子どもたちを中心に据え教師道は何かを学び自分の道を築いてきた。定年退職後も公務員は全体の奉仕者であることが身についており、地域でいろいろなボランティア活動に関わって来ている。

今や人生100年時代と言われ、喜寿を迎えた今日、健康で生かされるのであれば社会に役立ちたいとの決意を新たにするため今回の同窓会に幸福寿命に繋がる「社会貢献」という研修を取り入れた。

講師陣には県植物研究会顧問の木下氏「県内植物の特定外来・要注意外来の帰化植物と自然保護」、県防災推進員の岡田氏に「体験を元にした災害救援活動とボランティアコーディネーター」、学童保育で活動している本浄氏に「読書と心育て」について話してもらい、その後、全員でいろいろなボランティア活動体験を交流し、非常に盛り上がった。

今や将来社会に向け、いろいろな問題が山積みしている。例えば県は、放課後子ども総合プランとして、

放課後児童クラブ(厚生労働省)と放課後児童教室(文部科学省)を一体型の方で整備したいとしている。また、各市町村では介護保険の高齢者健康対策として、心地よい居場所づくりと生活支援コーディネーターの組織化を急務としている。加えて、災害対策は県と市町村が協同でかからねばならない。さらに、県教委は今年から教育振興方針第3期を掲げている。新教育の中では私たちの出番は少なくなってきているが、広い分野にまだまだ貢献できることがたくさんある。また、国連が、全世界で貧困や教育、気候変動・環境、ジェンダーに起因する格差を無くするという17項目の取り組み「持続可能な開発目標(SDGs)」を3年前に設定して、2030年までに解決するという。私たちにとってこの年こそ米寿の年である。こうした社会貢献を続けたいと決意を新たにする喜寿の同窓会であった。

(昭和39年 学芸学部4年制小学校課程卒)

研修会・同窓会

日 時 平成30年8月26日(日)
場 所 阿波観光ホテル
研修内容 「喜寿を迎えての社会貢献」
講 師 木下 覚、岡田 年弘、本浄 世子



総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL: 088-656-7103 FAX: 088-656-7298

E-mail: sksoumk@tokushima-u.ac.jp

【総合科学部の1年】

平成29年(2017)9月～30年(2018)8月

＊平成29年9月～平成30年8月

徳島大学総合科学部公開セミナーを開催

一般の方や大学生、高校生を対象とした市民講座である徳島大学総合科学部公開セミナー「人文知・社会知への誘い」を下記のとおり、開催しました。

平成29年(2017)

第8回 9月29日(金) 中村 豊 教授

「青石の考古学 -青石で石器を作った古代人-」

第9回 11月24日(金) 石田 三千雄 教授

「哲学は何のために -哲学への招待-」

平成30年(2018)

第10回 1月26日(金) 山本 哲也 特任講師

「『こころの健康』の脳科学 -精神疾患の理解とサポートに役立つ 学際的アプローチ-」

第11回 2月23日(金) 松嶋 一成 准教授

「イノベーションと経済・社会 -イノベーションで私たちの生活がどう変わるのか-」

第12回 4月27日(金) ヘルベルト・ウォルフガング 教授

「沖縄からオリンピアへ -本土空手道の歴史、精神と行方-」

第13回 6月29日(金) 内藤 直樹 准教授

「知っていますか? 徳島の世界農業遺産 -伝統農業の保全と活用に向けた国内外の取り組み-」

第14回 7月27日(金) 蓑森 健介 教授

「東アジアの中の日本と中国 -卑弥呼・聖徳太子から福沢諭吉へ-」

第15回 8月31日(金) 平木 美鶴 教授

「画面構成について -視覚誘導と感情表現-」

＊平成29年9月24日(日)・25日(月)

地域系大学・学部連携協議会に参加(鳥取県)

＊平成29年10月5日(木)・6日(金)

国立大学法人17大学人文系学部長会議への参加

茨木大学人文社会科学部主催により、第17回国立大学法人17大学人文系学部長会議がホテルテラスザガーデン水戸で開催され、大学改革にともなう学部・大学院の改組の現状と今後の課題等について意見交換されました。

＊平成29年10月12日(木) 徳島大学びざん会の開催

徳島大学びざん会(同窓会連合会)がザ・グランドパレスで開催されました。

＊平成29年10月19日(木)

優秀学生(3年次学生)表彰式

学業成績が優秀な学部学生(3年次学生)に贈られる優秀学生表彰式があり、学部3年次の優秀学生13名を表彰しました。

＊平成29年11月16日(木)

学部長と学部学生との懇談会を開催

学生14名、教職員13名が参加し、学生委員長の司会により、事前アンケートで寄せられた質問・意見を中心に、学生からの質疑に答える形で行われました。

＊平成30年2月6日(火) 康楽賞贈与式の挙行

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、長井記念ホール(蔵本キャンパス)で行われました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

〔教員の部〕 堤 和博 教授『『蜻蛉日記』上巻前半部の研究 -道綱母にとっての和歌-』

〔学生の部 学術研究関係〕

大学院総合科学教育部 博士後期課程 3年次

Hoida Ali Badr Badr

総合科学部 4年次

釜江梨紗、二宮彩夏、堂埜晴愛

〔学生の部 奨学生関係〕

大学院総合科学教育部 博士前期課程 2年次

中島真希

総合科学部 4年次

長田伊知子、織田くるみ、船越彩未

＊平成30年2月22日(木)

学長と学生との懇談会を開催

総合科学部からは学生3名(総合科学教育部1名、総合科学部2名)が出席しました。

＊平成30年2月27日(火)

教育部長と大学院学生との懇談会を開催

修了予定者4名、教職員10名が参加し、大学院教務・入試委員長の司会により、大学院生活、履修、修士論文、大学の設備などについての懇談が行われました。

＊平成30年3月23日(金) 平成29年度卒業式・修了式 ならびに優秀学生表彰式の挙行

アスティとくしまで午前10時より挙行されました。午後には総合科学部において優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時30分よりパークウェストンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は250名、

大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻22名、臨床心理学専攻11名、博士後期課程地域科学専攻が1名。優秀学生表彰者の4年生は次の通りです。

〔人間文化学科〕 森 恵、藤本有紀、長宗美香、
岸本弥里、山根 彩

〔社会創生学科〕 釜江梨紗、二宮彩夏、松浦大樹、
上岡野乃花、東 光暉

〔総合理数学科〕 谷 和紀、織田くるみ、塚本 淳

＊平成30年3月23日(金) 渭水会会長賞の授与

卒業式当日、12時40分より総合科学部第2会議室で、渭水会の石井 博会長より、第3回渭水会会長賞として表彰状と賞金が受賞者に渡されました。詳細は渭水会々報記事をご覧ください（P22参照）。

＊平成30年3月27日(火)

永年勤続退職者表彰式・祝賀会の挙行

＊平成30年4月2日(月)

平成30年度辞令交付式の挙行

午前9時30分より、徳島大学本部で野地澄晴学長より辞令交付が行われました。

＊平成30年4月6日(金) 平成30年度入学式の挙行

午前10時より、アスティとくしまで平成30年度徳島大学入学式が挙行されました。同日午後には総合科学部で大学院オリエンテーションも行われました。入学者数は、総合科学部182名、大学院総合科学教育部博士前期課程43名、博士後期課程2名。

＊平成30年5月26日(土) 渭水会総会の開催

当日14時より総合科学部第1会議室で開催され、平成30年度の事業計画が承認されました。

＊平成30年6月27日(水)

平成29年度総合科学優秀賞受賞者表彰式の挙行

優れた研究成果を発表した総合科学部教員に対して贈られる総合科学優秀賞に福森崇貴准教授が選出され、表彰式が行われました。研究テーマは、「人間文化・人間社会の向上に関するイバン研究」です。

＊平成30年7月29日(日)

総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催

在学生の保護者会である総合科学部振興会の評議員会・総会ならびに保護者懇談会（午後）が開催されました。参加者（延べ数）は延べ110名（実数63名）。

＊平成30年8月7日(火) オープンキャンパスの開催

総合科学部（社会総合科学科）のオープンキャンパスが開催されました。参加者数（延べ数）は、高校生776名、保護者292名。

【人事異動】

＊副学部長の紹介

総合科学部の副学部長（教育担当）に田島 俊郎 教授が選出されました。任期は平成30年4月1日～31年3月31日までの1年間。

＊コース長の紹介

総合科学部社会総合科学科の公共政策コース長に饗場 和彦 教授が選出されました。任期は平成30年4月1日～31年3月31日までの1年間。

＊名誉教授の就任

平成30年3月31日付で退職された次の教員が徳島大学名誉教授となりました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。

（ ）内は徳島大学での在職年数。

石田 三千雄 教授（30年 6ヵ月）

水島 多喜男 教授（27年 6ヵ月）

上野 加代子 教授（14年）

＊教職員の異動

平成30年3月31日付で、次の教職員が退職されました。

石田三千雄 教授（ドイツ哲学）

邵 迎建 教授（中国現代文学・文化）

水島多喜男 教授（湾岸産油国の社会変化）

石田 和之 教授（財政学）

上野加代子 教授（家族社会学）

松嶋 一成 准教授（経営学）

境 泉洋 准教授（臨床心理学）

平成30年4月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

山口 裕之 准教授（哲学（科学哲学））

矢部 拓也 准教授（地域社会学）

平成30年4月1日付で、次の事務職員が着任されました。

松木 由美 氏（総務係長）

佐藤 彰勇 氏（学務係主任）

藤本 早紀 氏（学務係事務員）

森 歩美 氏（総務係事務補佐員）

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報ならびに本学HPをご覧ください。

また、徳島大学同窓会連合会のFacebook (<https://www.facebook.com/bizankai/>) を開設しました。

徳島大学の情報をよりリアルタイムでお届けします。ぜひ、「いいね!」よろしくお願いします。

<徳島大学総務部総務課>

TEL: 088-656-9979 FAX: 088-656-7012 URL: <http://www.tokushima-u.ac.jp/>

Facebook



1 研究クラスターの構築

徳島大学では、新たなイノベーションを創出する環境を作るため、研究分野を超えた複数の研究者からなる研究集団（研究クラスター）を組織し、支援する体制を構築しました。平成29年度には、「自動運転機能付き徳島型電気自動車の開発」など、計138件が登録されました。登録後は、「重点」、「指定」、「選定」の各クラスターを選考し、効果的な研究費配分を行うこととしています。

今後は、これまでに登録されたクラスターを評価するとともに、2年目となる平成30年度には、新たなクラスターの登録を行います。

2 クラウドファンディングに挑戦中

研究者の研究費獲得手段の一つとして、平成28年度に開始したクラウドファンディングも、3年目を迎えました。徳島大学からは、これまでに「徳島大学ソーラーカープロジェクト」、「めざせ実用化! 水空両用型ドローン開発」など、10件のプロジェクトが挑戦し、皆さまから温かいご支援を多数いただきました。

平成29年度からは、インターネットを利用して課題解決を呼びかけ、不特定多数の個人あるいは団体から提案してもらう仕組みであるクラウドソーシングも開始しています。

3 平成30年度徳島大学入学式を挙行了しました

平成30年4月6日、アスティとくしまで平成30年度入学式を挙行し、合計1,920名の入学が許可されました。

入学式では、入学生を代表し、生物資源産業学部 of 松永愛結さんから「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓があり、野地学長から「偶然を味方にする能力が大発見をするためには必要です。」とのお祝いの言葉が贈られました。その後、在学生を代表して、理工学部の上谷政人さんから「大学の勉強や部活動など、まずは一芸を身につけることが大切です。」と歓迎の言葉がありました。

4 マスコットキャラクターが決定しました!

徳島大学マスコットキャラクターが、42件の応募作品の中から「とくぼん」に決定しました。今後は、徳島大学創立70周年記念事業や徳島大学の広報で活躍してもらいます。

はじめまして!
とくぼんです。



徳島大学基金へのご協力のお願い

「徳島大学基金」は、皆さまから事業区分ごとにご支援いただいた寄附金を基金として積み立て、徳島大学の教育研究等の発展のために使用させていただくものです。webサイトからクレジットカードやコンビニを利用したお申し込みも可能となりました。

● 創立70周年記念事業基金

2019年に迎える創立70周年の記念事業へのご支援

● 教育・研究・社会貢献事業基金

プロジェクト事業や全学的な教育・研究、管理運営、環境整備などへのご支援

● 国際交流・グローバル化事業基金

留学、教員の海外派遣など、国際交流事業へのご支援

● 修学支援事業基金

授業料等の免除など、学生の修学へのご支援

● 学部等支援基金

各学部、先端酵素学研究所の教育・研究や管理運営、環境整備へのご支援

● 古本募金 <https://www.furuhon-bokin.jp/tokushima-u/>

不要になった本、CD、DVDを寄贈いただき、買取金額を基金に充てます

詳しくは徳島大学基金
ホームページ
(<http://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/>) を
ご覧ください。



- 基金に関するお問合せ
徳島大学基金事務局
(担当: 総務部総務課)
TEL. 088-656-9981
- 申込手続き、税制上の優遇措置に関するお問合せ
徳島大学財務部資産管理課
TEL. 088-656-7037

●助成事業の申し込みについて

助成事業の要項に該当する事業をご計画の会員がおられましたら、お申し込みください。P43の申請書をコピーしてお使いください。事務局にご連絡いただければ、様式（Word形式）をお送りします。お問い合わせ・お申し込みについては事務局までお願いいたします。

●異動届のお願い

会員相互の親睦等同窓会活動に、また、会報のお届けにと名簿は、渭水会にとって、重要な財産のひとつです。名簿の整備には、鋭意努力しておりますが会員の皆様方のご協力が不可欠です。

現在、転居等により会報をお届けできていない会員も多数おられます。お手数ですが異動等ございましたらその都度事務局までお知らせいただければ幸いです。

会員数も膨大になり同姓同名の会員もおられます。誤記を避けるためにも、卒業（修了）年、課程（学科）、専攻（コース）、旧姓を記載いただき、できるだけ文書・ファックス・メールにてお知らせくださいますようお願いいたします。

●終身会員の募集についてのお願い

渭水会では、昭和54年入学生より終身会費制になりましたが、まだご存じない方がおられます。同窓会の折に渭水会の組織・事業等をお話いただき終身会員になってくださるようお勧めいただければ幸いです。終身会員には会報が郵送されます。

終身会費納付額

卒業（修了）年	納付額
昭和21年以前	4,500円
22～27	7,500円
28～33	10,500円
34～39	13,500円
40～45	16,500円
46～51	19,500円
52～57	22,500円

郵便振替口座番号 01610-1-21392
加入者名 徳島大学渭水会

なお、会報がお手元に届いている方は、すでに終身会員ですが、ご自分が終身会員かどうか分からない方は、事務局までお問い合わせください。

渭水会事務局

事務局は総合科学部1号館北棟1階入り口すぐ（部屋番号1N01）です。

業務時間および連絡方法は、以下の通りです。

時間／水曜日 13：30～17：00

（祝祭日および大学の休業日は除く）

TEL 088-656-7293（月～金 10：00～17：00）

FAX 088-657-7467

E-mail info@isuikai.jp

URL http://www.isuikai.jp

編・集・後・記

●表紙を飾る田村昇鶴氏の書には、渭水会が燦然と輝くようにとの想いが込められています。今号では28年間の長きに連載した「総合科学部では今」のコラムが幕を下ろし、代わって「総科をたずねて」が始まりました。装いを新たに、総科の現状と卒業生の活躍をお伝えします。 (J)

●常三島キャンパスでは、卒業生、修了生の、研究論文作成シーズンに入りました。一つのことに打ち込んで、懸命に日々を過ごしている様子は、（たとえ寝不足でフラフラしている日があっても(^_^;)）とても眩しく

映ります。学生生活の集大成、納得のいくものが仕上がりますように。 (U3)

●来年は徳島大学創立70周年のメモリアルイヤー。渭水会でも初の「ホームカミングデー」を開催します。青春時代を過ごした常三島キャンパスを訪ねいただき、楽しいひとときを過ごしていただければと思います。目玉は「同窓会in学食」です！皆さんお誘い合わせの上、ぜひお越しください。 (ね)



ようこそ！
母校へ

徳島大学創立70周年記念

ホームカミングデー(案)

～徳島大学は、2019年に創立70周年を迎えます～

昭和24年(1949年)に創立した徳島大学は、来年、創立70周年を迎えます。
これを記念して、記念式典、講演会をはじめ、さまざまな記念事業が開催されます。なかでも注目は、各学部の同窓会が中心となって開催する、初の**ホームカミングデー(HomeComingDay)**です。

ホームカミングデーは、2019年11月2日(土)。創立70周年記念大学祭でにぎわう常三島キャンパスで行います。卒業生の皆さん、この機会に懐かしいキャンパスを訪ねてみませんか？

詳細については、Webサイトで随時お知らせしていきます。どうぞふるってご参加ください。

日時

2019年**11月2日**(土) 13:30～ オープニングセレモニー
13:00～16:30(総合科学部キャンパスデジタルアーカイブ)

場所

徳島大学総合科学部内(〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地)
地域連携プラザ 常三島けやきホール ほか

入場料

無料 ※来場者に記念品贈呈

内容

1 総合科学部キャンパス デジタルアーカイブ(仮称)

懐かしい常三島キャンパスが今、よみがえる！徳島大学創世記の様子、時代ごとのキャンパスの変遷など、貴重な写真・資料をデジタル化しました。常三島キャンパス今昔写真展も開催！

2 同窓会 in 学食

ホームカミングデーの締めくくりに、大学の学食で同窓会はいかが？

美しく生まれ変わった学食は、パーティーも出来る設備が自慢です！

時 間 ✿ 2019年11月2日(土) 昼の部 12:00～14:00 夜の部 17:30～19:30

募集人数 ✿ 昼の部、夜の部ともに定員150名(定員に達しましたら受付を終了します)

対 象 ✿ 涓水会の終身会員の団体(ゼミ、サークル、学年など)が対象です。

団体の代表者(監事)がお申込みください。個人での参加は取り扱いません。

会 費 ✿ 昼の部、夜の部とも5,000円(2時間飲み放題付き)。お料理はビュッフェスタイルです。

《メニュー例》

お刺身舟盛り、寿司、ローストビーフ、鯛の香草焼き、阿波尾鶏の柚子胡椒焼き、レンコンチップ、
天ぷら(海老、牡蠣など)、そば米汁、フルーツ・ケーキ盛り合わせ etc

申 込 み ✿ 2019年9月1日よりお申込みを受け付けます。

下記事務局まで郵便、FAX、メールなどでお申込みください。定員に達し次第、受付終了します。

なお、会費は2019年10月21日(月)までに代表者が涓水会の郵便振替口座に払込みください。

払込み後の返金は受け付けません。

涓水会
事務局

〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地 徳島大学総合科学部内
TEL 088-656-7293 FAX 088-657-7467 携帯 090-2824-5006(事務局 大井)
メールアドレス info@isuikai.jp



ユーカリの花 (総合科学部キャンパスにて)